

兎が跳ねる！！

夜芝生

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——帝具。

1000年前、大いなる帝国の祖を築いた始皇帝の命によって作られた、使用者に大いなる力を与える48の超兵器。

これはそれらを操る強者達の中にあつて、ひたすら生き延びるために跳ね回り続けた『兎』と呼ばれた帝国兵の少女の物語。

アカメが斬る！ の女オリ主ものの二次創作になります。

オリ主ものも、一人称メインの文章も初ではありませんが、感想・ご意見を頂ければ幸いです。

目次

エスデス軍の首切り兎	1
兎の絆	33
狸と兎と次なる任務	68
首を刈る者達	105
そして、兎は出会った	138

エスデス軍の首切り兎

——雪の混じった寒風の吹き荒ぶ極寒の地……生い茂った針葉樹の林の合間を縫うように、数百の騎馬が駆けていた。

「——急げ!! 何としても奴を捕らえるのだ!!」

先頭を駆けるのは、切り揃えられた長髪を靡かせ、白銀の鎧に身を包んだ見目麗しい青年。

彼こそは、1000年もの歴史を誇ると同時に、腐敗し、疲弊しきつた悪逆を尽くす帝国を討ち滅ぼさんと立ち上がった北方民族の王子にして、『北の勇者』と称される英雄——ヌマ・セイカ。

彼は後に続く者達を鼓舞するように叫びながら、手にした長大な槍を樹上の影目掛けて振るう。

身の丈を遥かに超え、相応の重さを持つ筈のその穂先の疾さは、正に雷光。

達人などと言う言葉が、陳腐に思える程の技量と膂力によって繰り出される槍から逃れられる帝国兵は今まで存在しなかった……筈だった。

——しかし、常人ならば目視どころか知覚する事すら敵わぬ槍技を、樹上の影は嘲笑うかのように躲していく。

それどころか、繰り出された穂先を足場に他の樹へと飛び移られ、更には如何なる業であるのか、何も無い宙空を蹴ってこちらの射掛ける弓を避ける始末……まるで、宙を舞う羽毛を相手にしているかのような手応えだ。

樹上の影を追い続けて約半刻、このような無益な攻防が続けられていた。

(くっ……このままでは——!!)

ヌマ・セイカの中に、焦りが広がっていく。

これまで彼の率いる軍は、堅固な城壁と、雪山という天然の要害に守られた城塞都市を拠点に、連戦連勝を重ねてきた。

帝国が生まれてから幾百年もの間、極寒の地に押し込まれ、北の異民族と蔑まれて来た人々にとっての悲願である、凍らない大地を踏みしめる日も近い所まで来ていたのだ

……『彼女』が来るまでは。

——帝国最年少にして、最強と謳われる将軍、エスデス。

広大な規模を凍りつかせる程の力を持つ氷を操る帝具『デモンズエキス』をその身に宿し、凡百の兵士……いや、将など歯牙にも掛けない凄まじい武力を持つ彼女の力は、正に戦略級。

彼女たった一人によつて、数万もの友軍が一瞬にして氷の彫像と化し、無数の氷柱で串刺しにされた事もある。

それだけでも手に負えないというのに、彼女の部下には『三獣士』と呼ばれる側近がおり、それぞれもまた、強力無比な帝具を使いこなす化け物達であった。

そしてそれに付き従うは、絶対の恐怖と、血と鉄の掟によつて結束した選りすぐりの精兵の群れ。

……今まで積み重ねてきた勝利が、まるで夢物語であるかのように北方民族達は敗北

を重ね、とうとう拠点である要塞都市まで後退を与儀無くされ、今正に滅びの時を迎えようとしていた。

この状況を覆さんと、ヌマ・セイカは今まで培ってきた軍略の全てを賭けて、自らを筆頭とした少数精鋭による、敵本陣への電撃奇襲作戦を立案する。

ギリギリまで綿密に打ち合わせをし、秘密の通路と回廊を使い、少数の部隊を少しずつ、少しずつ集結させ、準備を進めてきた。

——側近である三獣士達は前線で要塞都市の攻略の任に就いており不在、本陣の守りも、エスデス本人の強さからか必要最低限の人員しか配備されていないという情報も、敵方に紛れ込ませた間諜からもたらされ、正しく千載一遇の機会。

残るは敵本陣へ進軍し、エスデスの首を取る……そうすれば一人のカリスマに支えられた軍は瓦解するだろう。

しかし……ヌマ・セイカは最後の最後で、致命的な油断をしてしまった。進軍を開始した矢先に、それを『奴』に察知されてしまったのだ。

『おのれ……おのれ……っ!!』

今までに飲まされた煮え湯の数々を思い出し、ヌマ・セイカはその端正な顔を引き攣らせる。

『奴』の知名度は、エスデスや三獣士達と比べれば全くの皆無とも言つて良く、その武力も知略も彼らには遥かに及ばない。

しかし、それは『奴』の脅威とは何ら関係が無かつた。

『奴』は戦場を選ばず何処からとも無く現れ、気まぐれな兎の如く跳ね回つては、去つていく——こちらの軍の動きと策の情報という、戦場においては命にも代え難いものを奪い取つて。

攻勢を、防衛を、反撃を、奇襲を、撤退を——何度潰されたか分からない。

百、千、万の兵士で囲んだ事もあつた。

常人ならば読み取る事など出来ない程の複雑な暗号や符丁を駆使した事もあつた。

熟練した登山家でもそう簡単には通れない、断崖絶壁を使った事もあった。

……それでも『奴』は、それを嘲笑うかのように現れ、情報を奪い取って無傷で去っていく——こちらの追撃を、悉く潰しながら。

そして、その情報を元にエスデス軍が圧倒的な武力を以て打ち掛かる。

今までの同胞たちの犠牲は、『奴』がいたからこそ数倍、数十倍にも跳ね上がったのだと言つても過言では無い。

こちらの企みの全てを、エスデス軍の圧倒的な武力を、『たった一人』で潰し、若しくは支えるその姿を、北方民族の兵士達は、とある危険種の名を取つてこう呼んだ。

愛らしい姿に鋭い牙を隠し持ち、一瞬の隙を突いて獲物の急所を切り裂き、葬り去る二級危険種生物——、

「おのれ……首切り兎め!!」
ヴォーバルラビッツ

(ぎゃあああああつ!! 死ぬっ!! 死ぬっス!! 死んじやうっスうううううっ!!)

何やら異国語で叫びながらトンでも無い速度で槍を突き刺しまくってくるイケメンさんから全速力で逃げながら、アタシ——ラビィ・ラズトンは心の中で叫ぶ事しか出来なかつたっス。

——だって、そんな無駄な酸素なんて無いんスもん!!

追いかけられ始めてから早半刻——もう既にアタシの心肺機能は限界でした。

バックンバックンどころの話じゃなく、ドドドドドドドツ、とまるで機関銃のよう。

しかしそれでも逃げられているのは、アタシの膝上から爪先にかけて装着された、純白の美しい——自分の事っスけど、事実だからいいっスよね?——ブーツのおかげでした。

これこそアタシが所持する帝具、『一日万里』シロウサギ白兎。

何でも、『一日で千里を駆ける』と言われた斥候兵が、敵の策を見抜けたにも関わらず、人の身の足であったが為にその伝達を間に合わせる事が出来ずに友軍を失って涙する姿に心打たれ、始皇帝が彼に与えたのがコレらしいっす。

その特徴は、何と言っても二つ名に恥じぬ圧倒的な『機動力』。

『今だ!! 着地を狙え!!』

北方民族の人たちの言葉は相変わらず聞き取りにくくて、走りながらじゃその内容まで読み取れないっすが、大体言いたい事は分かります——丁度獵師か何かの休憩所だったのか、木が切り払われて開けた場所に、私が着地しようとした所だったっすから。

——けど、甘いっす。

後ろから聞こえてくる蹄と弓を番える音は、相変わらずアタシの背筋をゾクゾクと刺激しますが、こんな単純な事でやられるようなら、今日この日まで生きてなんかこれな

かったつスよ、ええ!!

その程度には信頼してるんす、白兔このこの事を。

そんな訳だから今回も頼むつスよ、マジで頼むつスよ、つーか失敗したら確実に殺されるどころか、下手したら発禁本の如きエロネチヨになる可能性もあるスからあああああつ!! と、心の中で叫びつつ、白兔に搭載された機能の一つを解き放ちます。

「——かけうさぎ 駆兔つ!!」

爪先が地面に触れた瞬間、頭の中でスイッチを押す——その瞬間、白兔の靴底から爆発するかのような勢いで光が吹き出し、ほぼタイムラグ無しに私の体を凄まじい勢いで前に運びました。

その効果は見ての通り、馬車やともすれば特級危険種すらも振りきれ程の超加速。

放たれた矢は、大分遅れて雪の上に突き刺さったつス……分かっていても滅茶苦茶怖いつスけどね!!

そして再び先頭集団から距離を開けると、間髪入れずにもう一回——!!

「はねうさぎ 跳兔つ!!」

今度は上に目掛けて足を蹴りだすと同時に、光の噴出——瞬きの間に、私の体は重力？ 何それ美味しいんスか？ と言わんばかりの勢いで、数十メートルの高さにまで飛び上がっていました。

そして、樹の頂きに生えていた指の太さほどの枝に爪先をかけると、それを足場に更にジャンプして距離を稼ぎます。

これが機能の2つ目、超跳躍と、その間における体重制御——平たく言ってしまうえば、物凄く体を軽くするというもの。

何でも知人の拳法家曰く、皇拳寺に伝わる軽気功って奥義に似てるらしいんですけど……まあ、今は小難しい事はどーだっていいっす。

ともかく、これで50mくらいの距離を確保!! このままこんな風に逃げればその内煙に巻く事だって——!!

……という私の淡い期待は、すぐさま打ち砕かれました。
『空中にいる間を狙え!! それならば!!』

また何やら先頭のイケメンさんが何やら叫びました。

そしたら、後方から連弩れんと——カートリッジのように弓を再装填出来るようにした、連発式のクロスボウツス——を構えた隊列が現れて、枝を足場に飛んだばかりの私目掛け

て狙いを定めます。

……もう嫌つス何なんつスカあのイケメン、その場の対応力高すぎつスよ。

そりやエスデス様来る前には、常勝無敗とか言われる訳つスよ——どんだけチートな
んスカ。

まあソレ以上のチートを間近で見てるせいで、それが霞んじやつてるのはちよつと悲
しいつスけどね。

『放てっ!!』

そんな風に愚痴ってる間に、号令の下一斉に放たれる連弩の矢——都合50発程で
しようか。

銃に匹敵する速さで、落下速度と可能な限りの回避方向を計算した弾幕が襲いかかり
ます。

つまり、自由落下に入ったこの状況では避ける事なんか不可能、防御なんか皮鎧と防
寒着しか着てない以上もつての外……絶体絶命つス、普通だつたら。

だからこそ、アタシはもう一つの機能を解き放ちました。

「——月兎つきうさぎっ!!」

そう叫ぶと、足裏から再び爆発するように光が噴出し、私は文字通り空中を蹴って弾幕を凌ぎます。

左足が沈む前に右足を、そして更に右足が沈む前に左足を蹴る事で、擬似的に飛んで続く斉射を躲しました。

勿論、避けた矢を足場にして、更に距離を稼ぐことも忘れないっす。

——こう書くと簡単っすけど、実際はメッチャ怖いつすけどね!?

耳元とか体の脇を、風切り音響かせながら、剣呑に光る鎌が通り過ぎるのは勿論、本来足場の無い所で走るのなんて一歩間違えれば地上まで真っ逆さま、矢に足を掛ける瞬間なんか、走ってる馬車に飛び乗るのなんて生易しく感じるぐらいに体引っ張られますし!!

アタシのノミみたいな心臓は最早限界寸前っすよ!!

まあでもこれで華麗に空中を舞って、格好いい活劇小説ならば、さあここから攻撃用の機能を発揮して敵をバツバツと薙ぎ倒し……となるんでしようけど……。

——ぶっちゃけこの帝具、由来からして戦闘向きじゃないんすよね……。。

そりや、物凄い早く動ける訳ですから、色々役には立つつスよ？　そこらの一般兵なら視認出来ない程の動きで動けますし、白兔自体も物凄い堅い特級危険種から削り出した装甲を持ってますからそんなじよそこらの攻撃じゃ傷一つつきませんし。

ですけどね……。こちとらその一般兵に毛の生えた程度の技量しか持ってないんすよ
おとおつ!!

——元々は私ただの斥候兵つスよ!?

帝都にいるセリユー（あ、この子は警備隊に所属する、同じく帝具持ちの友達つス）とは違って、戦闘訓練なんて最低限しか受けてないんすから!!

そもそも敵はイケメンさんを筆頭に、この極寒の地で長年帝国兵を相手取ってきた猛者達……。そもそもその地力で勝てっこないつス。

帝具が如何に強力だったとしても、連弩の一斉射撃とか、槍袂とか食らったら生身の部分は普通に死ぬんすよ普通に。

それに突っ込んで一人ひとり蹴り倒せてか!? 無茶言うなっス!!

——そんなのやるくらいだったらその分の体力で全力で逃げるっス!!

「ぜえ……ひい……も、もう、限、か……」

でもその体力が、もう尽きようとしてたっス。

帝具の方は「やるぜ、俺はやるぜ」と言わんばかりにやる気満々なオーラを放ってますが、装着してる私自身の体力は限度があります。

足の回転も段々遅くなっていくのが分かります……敵集団との差もジリジリと詰まってきました。

——嗚呼、天国のお父さんお母さん、あと大好きだったお婆ちゃん……ラヴィもそろそろ最期の時が来たようっス。

せめて、死ぬ前に帝都のロツテリ屋のハンバーガーをお腹一杯食べたかったっス……。

あ、ヤバイ——死んだ家族と大好物のハンバーガーの幻覚と同時に、何だか心が穏やかなるようなメロデーの幻聴が聞こえてきたっす。

——頭の中を洗い流して、全てを委ねてしまいたくなるような、そんな音色。

それを聞いたアタシは、追いかけてられているのも忘れて走るのを止め、その美しい音色に聴き惚れてしまいました。

あれだけ暴れてた心臓や肺が嘘のように穏やかになっていき、同時にそれに併せて敵軍の人たちも夢見心地のような表情になっていきます。

……ん？ 敵軍の人たちも？

「——おいラヴィ、ぼんやりしているとテメエごとばつきりだぜえ？」

ぼんやりとした頭に一瞬引つ掛かりを覚えた瞬間、野太い剣呑な声と共に、私の胸を泣き別れにする軌道を描いた何かが森の木立の間から飛来しました。

「え……わつきやあああああつ!？」

まるで南方民族の踊りみたいに思いつきり反り返ると、胸に触れそうな位置を、物凄い勢いで旋回する巨大な斧が通りすぎて行きました。

それは全く勢いを失わずに、咄嗟に反応出来たイケメンさんを除く前衛の人たちを容赦無く薙ぎ払います。

うえ……手とか足とか人のパーツが飛び散りまくってる……スプラッタっスねコレ。

そして、その惨劇の主である斧は、どういう原理かブーメランのように弧を描いて、元の場所まで帰って行きます。

人のこと言えませんが、こんな馬鹿げた物理法則ガン無視の武器……帝具以外に有り得ないっす。

そしてその予想通り、長柄の巨大な両刃式の戦斧を持つ帝具、《二挺大斧》ベルヴァークを携えて、まるでライオンの鬣のような髪と髭を持つ、身長2 m程のオッサンが姿を現しました。

「ちよ、ちよっとおおおおおっ!! 殺す気っすかダイダラさああああああんっ!?」

「ガハハハッ!! ちゃんと避けたんだからいいじゃねえか」

「良くないっ!! 良くないっすよちよちよっ!!」

こっちを軽く殺しかけといて豪快に笑うこの人はダイダラさん——エスデス様直属

の精鋭たる、三獣士の一人っす。

悪い人じゃないんすけど……見ての通りアホみたいな脳筋なのが珠に疵な困った人っす。

がるるる……と、ダイダラさんに向かって歯を剥き出していると、今度は近くの樹上から小生意気な笑い声が響きました。

「あつはつはつは!! 相変わらずからかいがあるよねえ、ラヴィつてさあ」

そこには、一見少女と見紛うぐらいにキレイな顔をした小柄な少年が腰掛けていたっす。

手にしているのは笛——それはさっきまで戦場に鳴り響き、アタシ諸共敵軍を茫然自失とさせた元凶でした。

名は『軍楽夢想』スクリーム——聞いた者の感情を自在に操ってしまいういらしい帝具っす。

外見はアタシと殆ど変わらない位に幼いツスが、コイツもまた三獣士の一人。

「ニヤ〜ウ〜ツ!! いつも言ってるっすけど、こつちまで巻き込まないで欲しいっす!!」

「まあまあ、ある程度は耐性付いてるんだからいいじゃん？ 死んだら死んだで生皮剥がれて僕のコレクションになるから全く問題無いし」

「問題しかねえツスよおおおとおつ!!」

何かとお固い軍っていう組織の中で、軽いノリそのままいてくれるんで非常に助かってはいるんすけど……問題は、聞いての通り倒したり、気に入った人間の死体の顔を剥いでデスマスクを作るっていうイカれた趣味ツス。

しかもアタシの顔はかなりの顔に入りみたいで、何かとチャンスがあれば剥ごうとしていきます……こんなソバカス顔の何処か良いのかは理解に苦しむツス。

『ば……馬鹿なっ?!? 三獣士だと?!?』

『奴等は今頃要塞都市攻略にかかりきりの筈!!』

と、そんな風にニヤウと話している間は、無論スクリームの演奏は止まってる訳で——ベルヴァークの投擲から生き残ったイケメンさんを筆頭とした一団が正気を取り戻したみたいっす。

何やら叫んでるツスけど、その内容は聞かなくても大体分かります。

大方、今頃自分達の拠点を攻め立ててる奴らが、何で遠く離れたこんな場所にいるのか? ってトコですかね。

『——最早、その必要が無くなったからだよ、北方民族軍の諸君』

その疑問は、現地人よりも洗練されてるんじゃないかって位流暢で、気品と威厳に溢れた声が答えてくれたツス。

現れたのは、綺麗に整った口髭を蓄えた、軍人の精悍さと、洗練された貴族の風格を併せ持った壮年の男性——三獣士の最後の一人にして、エスデス軍最高の軍師、リヴァさんだったツス。

「リヴァイ、ご苦労。後は我らの役目だ」

後ろには、敵軍の数倍はいるんじゃないかってぐらいの帝国兵さん達——アタシに引きつけられた敵軍が近づくまで、気配を完全に殺して待ち伏せてたんスね。

……それだけで、エスデス軍の練度の高さ、リヴァさんの統率力が伝わると思いません。

『そ、それはどういう——!?!』

『——目を背けるのは止めたまえ、北の英雄よ』

動揺したイケメンさんに、リヴァさんはまるで出来の悪い生徒を窘めるかのような憐れみを込めた溜息を吐くと、彼らに対する死刑宣告を下したツス。

『——既に、貴殿らの拠点は陥落した。生き残りは、我が軍が悉く蹂躪している最中だ』

その言葉に、目に見えて敵に動揺が走ります——まあ、無理も無いっすよね……満を持して別働隊として出発したのに、敵陣に達する前に帰る所が無くなったなんて聞かされたら、アタシだったら発狂するっす。

『出鱈目を!! 我らが要塞都市の門が、そう易々と突破される筈が無からう!!』
『確かに堅固だった——敵ながら賛辞を贈ろう……だが、関係無いのだ。あのお方がその気になってしまえばな』

そう言うと、スツ、と片手を挙げるリヴァアさん——すると、それに合わせて帝国兵さん達が一齐に小銃を構えて隊列を組みました。

『そして信じようと信じまいと……貴殿らがここで果てる事に変わりはない』

『……っ!? 全軍!! 一時後退!! 体勢を立て直すぞ!!』

そこでようやく、我に帰って味方に向かって指示を飛ばそうとするイケメンさん——けど、全ては遅すぎたんすよ。

——アタシにかまけて深追いした時点で、アンタらの運命は決まっていたんす。

次の瞬間、彼らの退路を断つように、轟音と雪煙と共に、巨大で分厚い氷の壁がそびえ立ちました。

少し遅れて、その衝撃と寒風がアタシの体を撫で回します——ううつ、この距離で防寒着越しにこの寒さ……ヘタしたら壁の側にいた敵兵さん達、凍りついてるんじゃないスかね？

そして、こんな超常現象を起こせる人を、アタシ達……いや、この戦場にいる全ての人が知っていたス。

『——コソコソするのはもう終わりだ、芥ども』

その声が戦場に響いた瞬間、帝国兵の皆さんが一斉に道を開けて直立不動の姿勢を取り、三獣士全員が跪きます——勿論、アタシも慌てて続いたツス。

そこに現れたのは、雪よりも白い軍服に身を包み、氷よりも冷たい美貌に凄絶な笑みを浮かべた我らが主——アレこそが帝国最強と名高い將軍、エスデス様ツス。

『戦略上必要だったとは言え、あまりにも一瞬で終わってしまったって、私としては少々物足

りなくてな。

——だからせめて、貴様らの足掻きと散り様で溜飲を下げる事としよう』

そして、あまりにも非現実的な光景に、呆然とする敵軍の人たちに向かつてたおやかな指先を向けると、まるでお使いを頼むかのように簡単に、一言だけ、告げたっス。

「——蹂躪しろ」

——その後の結果は、細々と説明する必要も無いツスよね？

ダイダラさんが雄叫びを上げながらベルヴァークを振るって、敵を数十人纏めて肉片に変えて、

ニヤウがスクリームの音色で、撤退しようとする敵軍を混乱させて烏合の衆と化した所に、リヴァさんの号令の下、戦列を構えた銃兵の一斉射撃が蜂の巣にし、

総崩れになった所を騎兵による突撃を受けて、北方民族軍の皆さんは次々と討ち取られ、総崩れになっていったツス。

その間、アタシは何をしていたかといいますと……、

「——ラヴィ、 困役（こ）苦勞。

お前はこちらに来て休んでおけ。流れ弾に当っては面倒だからな」

「は、ハイッス!!」

敵軍の人たちによる血煙のダイヤモンドダストを、愉悦の表情で見下ろすエスデス様の陰に隠れて休憩してたツス。

時折連弩や銃弾が風切り音と共に飛んで来ますが、その全てはエスデス様が抜き放ったサーベルや、瞬時に生み出した氷の盾によって防がれました。

——ある意味最強の盾のような存在に守られながら、アタシは眼下に広がる光景を見

下ろします。

そこにあるのは、ただただ成す術無く藁のように刈り取られていく敵軍の人達の体と、生命。

悲鳴と慟哭、絶叫と断末魔。

絶対の強者とそれによって喰らわれていく弱者。

そこには、残酷だけれど、決して目を逸らす事が出来ないモノが広がっていたツス。

思わずぶるり、と体が寒さとはまた別の原因で震えます。

「——ふん、私に拾われてからも何年も経つというのに、未だに鉄火場の空気には慣れんか」

「あ、い、いえっ!? そんな事無いツス!!」

慌てて頭を振って誤魔化しますが、エスデス様は冷たい視線でアタシを見下ろしながら、手を伸ばしたツス。

叩かれるか、髪の毛を掴まれるのか、はたまたデコピンされるのか……ビクビクする余り、目を瞑りながら身を縮こませていると、その手はアタシの髪の毛をくしゃり、と

撫でていたツス。

「今はまだ、それでいい。貴様の性質タチが闘争に向いていないのは重々承知だ。

……無論、この先もそのような体たらくならば、私としても考えがあるがな」

「あ、アハハ……」

手の平からは優しさと温もりを、目からはドSな絶対零度の視線という、両極端なア
メと鞭を頂いたアタシは、引き攣った笑みを浮かべるぐらいしか出来なかつたツス。

……つーか、下手に何か言つたら確実に揚げ足取られて、(あくまでエスデス様基準で
は)ソフト拷問コース一直線なのは目に見えてますし。

……ああああ、鞭と蠟燭の痛みを思い出して全身が痒いツス。

「——だが、今のこの光景は決して忘れるな。

あれがこの世の摂理だ……強者と弱者、勝者と敗者、虐げる者される者の姿だ」
続けてそう漏らすエスデス様の目は、先ほどまでのような戯れの混じつたものでは無
く、何処までも真剣で、何処までも冷たいものだったツス。

「ああなりたくなければ、強くなれ。弱者を打ち破り、滅ぼす力を手に入れろ。

それが出来ないならば、せめて何処までも足掻いてみせるがいい。

敵から、強者から、脅威から、死から……逃げて逃げて逃げ続け、その全てを振り切る事が出来た時、それこそがお前にとっての最強だ。

——白兎^{ソレ}は、お前がそう望んだからこそ、与えたモノなのだからな」

「……おこ」

その言葉に、アタシはただ頷いたっす。

——もう臆気ツスけど、覚えているのは、大勢の人達からただひたすら逃げるアタシ。

思い出すのは、逃げている時の呼吸と動悸の苦しさ、手足の痛み、飛び込んだ谷底の川の水面の衝撃と冷たさ。

そして、差し伸べられたと同時に払われた手——それを再び掴む為に、爪が剥がれ、骨が見えるまでに断崖の岩肌をよじ登り続けたアタシの手。

断崖の頂まで辿り着き、ボロボロになった自分を、そつと抱きしめてくれた氷の女王^{エスデス}様の温もりと、授けられた帝具^{ちから}。

幼い頃の記憶は殆ど失ったアタシツスが、それだけはハッキリと思い出せるツス。
エスデス様は、ハッキリ言つて死ぬほど怖いし、強いし、この人に付いていつたら死ぬのは二度三度じゃ済まないでしょう。

けど——こんなアタシに力を授けてくれたのは、この人なんす。

——ならばせめて、死なないように何処までも逃げて、足掻いて見せるツスよ。

……と、恰好付けた所で終われば良かったんすけど、趨勢が決したかと思つた戦場から、一騎の騎兵が三獣士を躲してアタシとエスデス様目掛けて突つ込んで来たツス。

それは正しく、先ほどまで先頭を切つてアタシを追いかけまわしてたイケメンさん……ヌマ・セイカさんだったツス。

『おのれえええええええっ!! せめて一太刀——っ!!』

鎧を砕かれ、全身の無数の刀傷と銃創から血を垂流しながら迫るその姿は、正に悪鬼——凄まじい眼光に、思わずアタシの体が竦みました。

傍らにいたエスデス様はそれを涼風のように受け流すと、つまらなさそうにサーベルを構えたツス。

——けど、ヌマ・セイカさんの狙いが何なのかを悟った瞬間、その表情が凍りつきました。

その槍の穂先は、エスデス様では無く、傍らに立つアタシに向かって伸びていたツス。

『首切り兎っ!! せめて貴様だけでもおおおおおっ!!』

……………うえええええっ!! あ、アタシツスカあああああっ!!

た、確かにこの場において一番アタシが弱っちくちこい(まあ、ニヤウも大概っスガ) ツスけども!!

英雄譚とかでは、そこは普通総大将であるエスデス様を狙う所じゃないツスカあああああああああっ!!

セオリーくらい守って下さいツスよおおおおおっ!!

けど、混乱した頭でそんな思考を巡らせている間に、穂先はアタシの喉元にまで迫っていたツス。

ヤバ……これ……避けられな——、

「——クズが」

次の瞬間、銀光が奔りました。

冷気を伴ったサーベルが、アタシの目には留まらない速さで振るわれたかと思うと、ヌマ・セイカさんの四肢と騎馬が、穂先ごと凍りつきながら砕け散ったツス。

そして、体だけになった彼目掛けて、エスデス様は踵を振り上げ——そのまま、地面に向かって叩き落としました。

『ガ……』

「最期の最期にようやく牙を剥いたかと思えば、与し易い者を狙うだと……？　呆れて物も言えんな」

最早呻く事すら出来ないヌマ・セイカさんの胸に、ヒールの踵を剝り込みながらエスデス様が睥睨します。

その表情は、それまでのものが生易しく思える程の怒りで満ちていたツス。

「そして何よりも……ラヴィを怯えさせたな？」

コイツは私のモノだ——すぐに碎けてしまいそうなちんちくりんなカラダも、オドオドしたそそる表情も、私だけが愛でる権利がある。

ソレを侵した罪……万死に値する」

『ガ……あ……アツ……!?!』

まるで言い聞かせるように、一言一言力強く、同時にヒールを更に食い込ませるエスデス様——ヤバイツス……完全にスイツチ入ったツスよこの人。

それにドサクサに紛れてトンでも無い事口走ってるんスけど……!?!

「貴様は恥辱の限りを尽くした後に家畜として飼ってやるつもりだったが、気が変わった。」

……欠片も残さず消え失せろ、芥が」

『グツ……あ……アアアアアアアッ!』

そして、一際大きくヒールを押し込んだ瞬間、ヌマ・セイカさんは断末魔の叫びと共に凍りつき、粉々に砕け散りながら吹雪の中に吹き散らされました。

これが、噂に名高い北の英雄の最期……文字通り、欠片すら残らなかったツスね。

(恨まないでくれ……って言っても無理だと思っスけど、せめて成仏して下さいッス)
何処までも報われないその姿に、アタシはちよつとだけ同情を禁じ得なかったツス。

……こうして、当初は『一年は掛かる』と言われていた帝国の北の異民族征伐は、僅か一週間という短期間で終わりを告げたツス。

エスデス軍ならば当然の、ごく当たり前の勝利——それはいつもと変わらない出来事の筈でした。

でも、その日を期にアタシ——ラヴィ・ラズトンの運命は確実に回り始めたんだと思うツス。

帝国に反旗を翻す革命軍、そして、彼らが擁する暗殺集団——ナイトレイドとの邂逅。それからアタシは、いくつもの出会いと別れ、戦いと逃走を繰り返しました。

……これは、帝国と革命軍の戦いの中で、必死に跳ね回り続けた、臆病な兎の物語ツス。

兎の絆

容赦の無い蹂躪激から数日後——アタシはエスデス様が控える天幕に呼び出され
たっす。

「——ラヴィ、お前に伝令を頼みたい。

帝都に、北の異民族の本拠を叩き潰した旨を報告しに戻れ」

「は、はいッス!!」

その言葉に、アタシはビシッ!! と敬礼を返したッス。

——これも、エスデス軍におけるアタシのお仕事。

普通だったら早馬でも一週間、飛行型の危険種を使っても数日かかる道程でも、アタシの白兎ならば2日とかからず踏破出来るッスからね。

……まあ、使いつ走りつて言われたらそれまでッスけど。

「帰還する日時は……そうだな、『残敵の掃討が終わり次第』とでも伝えておけ。

あとひと月は、それで理由イイワケは立つだろう」

「は、はひつ……!!」

アタシは必死に目線を若干上向きにしながら答えたっす。

でも、あからさま過ぎたのか、エスデス様はこちらをからかうかのように上目遣いのまま、ニヤリ、と嗤いました。

「ん？ どうしたラヴィ？ お前も混ざりたいか？」

「いやいやいやいや!! 滅相も無いっす!! ハイ!!」

風が巻き起こるような勢いで首を振るアタシ——その理由は、エスデス様の腰掛けるモノにあつたっす。

『う、うう………』

『あ、あ………』

——それは、かつて精強を誇っていた筈の、北方民族の精兵達によつて作り上げられた人間椅子でした。

以前の勇姿は何処へやら……全裸の上に目隠しと猿轡を噛まされて、力尽きて崩れ落ちるまで、屈辱的な隷属を強いられる、人間としての尊厳を踏みにじられた存在がそこ

にはありました。

あれ程の快進撃で、北方異民族の本拠を潰したエスデス軍が、未だにこの地に残つてモタモタしている理由がコレツス。

弱肉強食——強き者の前では、弱者はただ蹂躪されるのみ。

そして、倒れた弱者をどう扱つても、それは強者の自由であり、当然の権利である——それが、エスデス軍が掲げる絶対的な掟ツス。

アタシは見えてはいない——そもそも見る気も起きない——ツスが、今頃市街地や、各地の集落では、傭兵の人達や、末端の食い詰め兵士達による略奪や殺戮、陵辱の限りが尽くされている頃でしょう。

元々は敵軍の本拠であつたこの要塞都市も、そこら中に痛めつけられた死体が吊るされ、毎日のように人々の悲鳴が聞こえる魔都と化しています。

……ニヤウなんかは、出来のいいデスマスクが出来るといちいちアタシに見せに来る

から溜まったモンじゃ無いツス。

文句を言おうにも、そういった行為を総大将たるエスデス様が率先してノリノリでやってるんでそれも出来ないから困りモンなんスよねえ……。

唯一の救いと言ったら、厳格なりヴァさんはそういった行為には参加しないで、ダイダラさんが望むのはあくまで血湧き肉踊る敵との戦いツスから、そもそもそういったモノに一切興味無しって事位ツスカね。

まあその代わり、リヴァさんは料理と称して毒物劇物のような類いのモノをハンバーガー状にして度々持ってきますし、ダイダラさんはダイダラさんで、暇だからとアタシを戦闘訓練的的代わりをしたりして来るんで、色々な意味でアタシの身が危ないのは変わらない訳で……。

兎にも角にも、ビビりなアタシとしては、すぐにでもこの地から離れたい一心だったツスから、この命令は渡りに船だったツス。

——例えその内容が、虚偽の報告だったとしても。

あの悪魔のような大臣や、超怖い大將軍からのツッコミや探りを躲さなきゃいけない事を考えると、正直気が滅入るツスけど、背に腹は変えられないツス。

「と、兎も角任務了解しましたツス!! エスデス軍隠密機動部隊所属、ラヴィ・ラズトン、行つて参りますツス!!」

ともあれ、これ以上の長居は無用とわざとらしく大声を張り上げながら、アタシは再びビシツ!! と敬礼すると身を翻して天幕を——、

「まあ待てラヴィ、そう焦るな」

直後、ガシリと肩を捕まれて失敗したツス。

ちよっ!? 明らかに5 m近く離れた場所に座つてたツスよねエスデス様!?

それなのに音はおろか気配すら知覚させないで接近するって、相変わらず人間辞めてるツスよこの人!?

……その時のアタシの顔は、多分食べられる直前の仔マーグパンサーみたいになつたと思うツス。

「嗚呼、いいぞその表情……何とも言えずそられる……やっぱりお前は可愛い奴だよ、ラヴィ」

「は、ひやつ……そ、そそそその……あう……」

まるでこっちの魂ごと舐り尽くすような熱い視線で絡め取られながら、例え同性であつたとしても蕩けるような、それでいて見る者を不安にさせる危うい笑みを向けられると、アタシの体はかあつ、と熱くなつて、もう何にも抵抗も反論も出来なくなつてしまふツス。

あつ、やつ……!?! あ、顎に手を当ててクイツつと!?! こ、これ以上は駄目ツス!!

慌ててその手を振り解いて、追い詰められた側とは逆方向に慌てて逃げたツス……天幕から逃げ出すつて選択肢を選べないつて辺り、アタシの小市民っぷりがどれだけか理解してくれるでしょう。

「むう、つれないな……拾ったばかりの頃はこのぐらい押せば軽く押し倒せたというのに……」

それを嘆くべきか、はたまた私の手を振り解いた成長を褒めるべきか……判断に迷う所だな」

顎に手を当てながら、すこぶる残念そうに小首を傾げるその姿は、いつも戦場で見せる厳格な姿とは裏腹な年頃の少女のように可愛らしい動作でした。

……まあ、動作は可愛くても、その思考は肉食獣そのものツスけどね。

「——だが、そうだな……無理強いして強引に攻めるのも悪くない。

お前をそういう風に攻めるのは、中々に新鮮だと思うんだが……どう思う？」

そう言いながら、屈むようにこつちを覗き込みます——って目の前に胸が!?! 胸の谷間があっ!?!

いくら同性とは言っても、このポリウムを目の前に差し出されたら、ドギマギするに決まってるじゃないツスか!!

……一瞬、それ以上に悔しくなったのは秘密ツスけど。

コラそこ、アタシの体を見て『つるーん』とか『ぺたーん』ってオノマトペを想像するのを止めるツス。

「ど、どう思うって言われてもツスねえ……!?」

と、ともかくっ!! それはそうと残りの用件を聞かせて欲しいツス!!」

アタシは再びドSな笑みを浮かべ始めるエスデス様の思考に割り込むように、大声を上げながら質問したツス。

——如何に遊んでいるとは言っても、エスデス様はこの軍の指揮官ツス。

飼いならされたマーグファルコン（長距離の過酷な環境下で伝書鳩代わりに使われる危険種ツス）でも済ませられるような用件を、伝令の究極系みたいな帝具持ちのアタシに任せる訳がありません。

つまり、この伝令任務にはそれとは別に他にプラスαの何かがあるって事ツス。

どうツスカこのアタシの完璧な論理的思考!! アタシだって日々成長してるんす!!

……実はついさっきまで、天幕から逃げる事に夢中で、呼び止められるまで気付かなかったなんて事は無いツスよ、ええ。

「——まあ、獲物の肉は捌きたてよりも熟成させた方が良いと言うしな……我慢すると

しよう」

今の平穏と引き換えに、確定するアタシの何処までも暗い未来——アカンツス、また冷や汗が出てきたっス。

と、ともかくっ!! 今は取り敢えず第二の任務に集中集中ツス……。

「2つ目の用件は、帝都にいる『ヤツ』と合流して、情報収集を頼みたい。

私がない間の大臣を始めとした中央情勢に、各地の革命軍や異民族の動向や討伐状況……色々あるが、メインは最近帝都を騒がせているという、例の暗殺集団についてだ」

気を取り直して始まった任務の内容は、ありきたりなようで、かなり重要なものだったッス。

「暗殺集団——ナイトレイド……ツスね？」

アタシが確認の意味を込めて問いかけると、エスデス様は頷いたっス。

ナイトレイド……帝国に反旗を翻す革命軍によって、腐敗しきった帝都で悪逆非道を

繰り返し、民を苦しめる外道共を討つために結成されたという彼らは、主要メンバーの全員がそれぞれ文献にも残る程の強力無比な帝具を所持していると聞いています。

中でも顔と出自が判明しているリーダー各と古参の四人には、帝都の貴族でも一生遊んで暮らせるんじゃないかってくらいに多額の賞金がかけられているツス。

その義賊的な立ち位置から、ある程度の情報統制が敷かれた皇帝のお膝元たる帝都でも、一定の支持者がいるという革命軍の中でも稀有な立ち位置のチームツス。

そう言った意味では、大臣の下で旨い汁を吸っている奴らにとつては、正に目の上のタンコブ——近々大規模な掃討作戦が開始されるんじゃないかっていうのが、帝国兵達の間ではもっぱらの噂。

……ん？　つて事はつまり——、

「察しが良くて助かるな。恐らく奴らの討伐には、私が任される事になるだろう。

……これは、そのための前準備であると思ってくれていい」

ピクリ、とアタシの眉が跳ね上がった事に気付いたのか、何処か嬉しそうに笑うエス

デス様。

——あー、やっぱそうなるツスよねえ……。

何せエスデス軍は、現状6人の帝具使いを擁しています。

帝具使いを倒せるのは、一部の例外を除けば帝具使いのみ——エスデス様に声が掛かるのは、確定事項みたいなモンツスね。

「だが、討伐を終えたからと言って馬鹿正直に帰還したならば、ロクな準備や下調べもないままに面倒事を押し付けられるに決まっている。

——オネストにならばともかく、取り巻きの有象無象共に嘲られるのは我慢ならん……想像しただけで、思わず手が滑ってしまいそうだ」

何か嫌な事でも思い出したのか、エスデス様は不機嫌そうに顔を顰めたツス。

オネストってというのは、現皇帝陛下を傀儡の如く操って、帝国の全てを牛耳っている大臣の事ツス。

本人の性格は、この世の悪逆非道の悉くを凝縮させて煮詰めたような正に悪魔、つて感じの外道ツスけど、例えば好き勝手していても、一切尻尾を掴ませないまま、国が腐り

きつて崩れ落ちない絶妙なバランスで運営する手腕は化け物染みてるツス。

エスデス様曰く、それ相応の見返りさえくれてやれば、それなりの恩恵には預かれるらしいので、一定の評価はしてるみたいツスけど。

……まあ、問題はその周囲の取り巻き——はつきり言つて、アタシから見ても下衆で無能な俗物共の吹き溜まりつて感じツスから、徹底的な実力主義なエスデス様からしたら、將軍つていう立場さえ無ければ、多分皆殺しにしてるんじゃないっすかね？

まあ、それはひとまず置いて……内容は理解したツスが、問題はどの程度まで詳細な情報を集めるかツスね。

それによつては、こつちがどう動くか——ぶつちやけ、どれだけ危ない橋を渡るかが決まるツスから。

……まあ、エスデス様が直々に指示する位ツスから、生半可な内容じゃないのは目に見えてるツスけど。

そして案の定、告げられた内容はアタシの予想通り、過酷なんてレベルのものじゃ無

かったツス。

「報告では、『ヤツ』が見つけたスパイから最低限の情報は得ているらしい……贅沢を言えば、何とかして直接対峙して、戦力を把握しておきたい所だな」

「ゲツ……!? て、『帝具戦』ツスか!？」

アタシが思わず潰れたカエルみたいな声を上げてしまったのは、情けないツスけど仕方ないと思います。

——『帝具戦』……それは、強力無比な帝具使い同士が対峙し合う戦いの事ツス。

正にこの世の摂理すらも捻じ曲げる程の力を持つ帝具ツスが、それ故にその力がぶつかり合ったならば、正に天変地異の如き様相を呈します。

そしてその戦いの後、残るのは1人だけ……帝具使い同士が戦えば、相打ちはあるも、どちらも生き残る事は有り得ないと言われていたツス。

「安心しろ、まだお前がナイトレイド共に対抗出来るとは思っておらん。

可能ならばすぐに離脱すればいい……だからこそその白兔だろう?」

引きつった表情のアタシを見て、困った奴だとエスデス様は溜息を吐いたツス。

まあ確かに、帝具戦が生じるのはあくまで正面からぶつかり合った場合——最初つか

ら逃げる事前提で動けば、その条件には当て嵌まらないって事ツスね。

……そ、それなら安心ツス。

とは言っても、一時的とは言え、百戦錬磨の帝具使い達と対峙する事には変わり無いんで、結局は死ぬ可能性あるんすけど、そこまで文句言ったら何も始まらないツスしね……。

それにある程度の命の危険なんて、この人に拾われてから覚悟の上ツス!!

「——了解したツス!! それでは、改めて行ってくるツス!!」

「ああ、また帝都で会おう——それまでいい子にしていれば、また可愛が^てやる。楽しみに待っている」

「ヒエツ……で、でででではすぐに準備して来るツスうううっ!!」

声を置き去りにしながら、這々の体で天幕からダツシユで立ち去ります。

こ、これから出発の準備やら、三獣士の皆さんに一言挨拶しなきゃならないツスからね、ええ!!

け、決して怖いからって訳じゃないツスよ!?

——あ、で、でも、可愛がるってどんな拷問プレイをするつもりだったんスカね……？

その内容がお預けになるのはちよつと寂しいというか残ね——!?

「……………つてわーっ!! わーっ!! ストップ!! ストップッスよアタシ!!」

な、ななな何を一瞬でも考えたんツスカアタシ!? 馬鹿ツスカ!? 自分の事ツスけど馬鹿ツスカ!?

……………え? もう手遅れ? 完全に調教済み?

……………。

……………。

……………。

……………アハハ、ソナコトナイツスヨ。

と、ともかくアタシは（今日何度目か分からないツスが）気を取り直すと、天幕から最低限の荷物を引張り出して、三獣士の皆さんの所を駆けて行くのでした。

そんなアタシを、周囲の帝国兵の皆さんは生暖かい目で見つめていたツス。

……………うう、穴があつたら入りたいツス。

三獣士の皆さんが寝泊まりする天幕に顔を出すと、まず目に入ったのは上半身裸のままベルヴァークを目にも留まらぬ速さで素振りするダイダラさんでした——冷気に当てられた体からは、白い湯気が上がってるツス。

ここ、バナナで釘が打てる位の気温の筈なんですけど……相変わらず脳筋バカの考える事は理解に苦しむツス。

「よう、ラヴィ!! 何だあ? 訓練しにでも来てくれたのか?」

「違うツスよ!! それとは別の用件ツス!!」

慌てて頭を振って否定します——それでもしないと、あつという間に襟を掴まれて拉致されちゃうツスからね。

……それにアレは訓練とは言わないツス。アレはただのベルヴァークの的代わりになってるだけツス。

それでも、当たる寸前には止めてくれますし、アタシ自身の鍛錬にもなってるんで、ちよつと複雑ツスが。

「ああ、例のナイトレイドとか言う奴らの情報集めか。面倒臭えなあ……帝都中を虱潰しに探して、さっさと叩き潰しちまえばいいのによ」

ダイダラさんの思考は脳筋なだけあって、とつてもシンプルツス。

それが出来ればどんなに楽かとは思うんすけどね……。

「まあ、それだけエスデス様も慎重になってるって事なんじゃないツスカね?」

……それにダイダラさんだつて、出来れば——経験値でしたっけ? それが一杯手に入られそうな人と戦いたいじゃないツスカ?」

「おお!! 考えてみたらそうだな!! いいねえいいねえ!! ラヴィもようやく理解してくれたか!!」

俺がどれだけ最強のための経験値を望んでるのか……理解者が出来て嬉しいぜえ」

「いや、毛ほども理解出来なすし、するつもりも無いっすよ念の為」

何やら勝手に盛り上がってるダイダラさんに向かって、アタシはビシツと手の平を突き出して否定したっす。

「なっ……!? 何だよ畜生、連れねえなあ……」

何故かシヨツクを受けて、ベルヴァークを取り落として蹲るダイダラさん。

ええい、2mもある巨漢が地面にしゃがんでのの字書いても全然可愛くも無いしウザったいだけっすから止めるっす。

それに何でアタシが虐めたみたいになってるんすか。

「五月蠅いなあ……何を騒いでるのさダイダ——つて、ラヴィじゃん。どうしたのさこんな所に」

そんな騒ぎを聞きつけたのか、天幕の中から、今度はニヤウが姿を現したっす。

アタシの姿を見た瞬間、何故か頬を赤らめながら、ニコニコ上機嫌な笑みを浮かべて近づいて来たっす。

元々美少年なだけあって、素の状態ならアタシでも思わずドキリとしてしまいそうに可愛らしいんすけど、その手に持った血に塗れたナイフと、服や顔などのあちこちに飛び散った鮮血がそれを台無しにしてるっす。

「でも丁度よかったよー♪ 今新作が出来上がった所でき、結構自信作なんだけど——」

「絶対に嫌ッス」

その新作とやらが何かは容易に想像出来るんで、皆まで言わせずに遮っておいときます。

「むー、何だよラヴィのいけずー。ノリが悪いつたら無いよねー」

するとニヤウは唇を尖らせながら何やらブーブー言ってますが敢えて無視ツス無視。

それでもしつこく「ねえーねえー」つと纏わり付いて来るツス……勘弁してくれないツスカね。

「あつ、それともとうとうボクのコレクションに加わってくれる気になった？」

だからアタシの前で浮気は許さないツスー、とか？」

「んな訳あるかああああああつ!! どういう思考回路してるツスカ!!」

あつ、ヤベツ反応しちまったツス。

こちらが反応したのを良い事に、更に笑顔を深めてガシリ、とニヤウはアタシの防寒着の袖を掴んだツス。

「それなんだつたら、ちょっとは見てくれても良いじゃん♪」

自分の顔が並ぶ前に、先輩に挨拶しとくのもオツなんじゃない？」

「どういう理屈……だーかーらー、放すツスうううつ!!」

ああもう!! コイツ本当に一軍を率いる将の1人なんスカね!?

こういう姿を見る限り、完全にサイコな我侭お坊ちゃんにしか見えないンスけど!?

「おーおー仲いいねえ。妬けちまいそうになるぜ」

「——黙るっスよその脳筋ダルマ」

しかも立ち直ったダイダラさんが訳の分からない茶々入れて来るモンツスからアタシのストレスは最高潮ツスよ!!

「——何やら騒がしいと思えば、やはりお前かラヴィ」

そんな風にニヤウやダイダラさんをあしらっていると、今度はリヴァさんが姿を現したツス。

……って、やはりって何スカやはりって。人間きの悪い事言わないで欲しいツス。

「エスデス様から詳細は聞いている——まだ年若いというのに、お前には苦勞をかけるな」

そう言うのと、リヴァさんはそつと目を伏せながら頭を下げてくださいました。

元、という肩書が付くとは言え、將軍を務められる程に目上の人——そんな事されたら恐縮してしまうツス。

「い、いやいやいや!! リヴァさんが頭下げる事なんて無いツスよ!!」

元々エスデス様に拾われた命ですし、このぐらいの事なんて苦勞の内にも入らないツ
ス!!」

「——そうか、ありがとう。そういつてくれると、あのお方に仕える冥利に尽きるという
ものだ」

アタシの言葉に、慈しむような笑顔を浮かべるリヴァアさん——そう言えばこの人も、
大臣に贈る賄賂を汚つたのが原因で無実の罪で処刑される寸前に、エスデス様に拾われ
たんでしたっけ。

こんないい人が突然変異みたいに出て来るんすから、そう言った意味ではまだまだ帝
国も捨てたモンじゃ無いって事なんすかね？

——しかし、次にリヴァアさんが言い放つた言葉に、アタシの体はまるで足元の凍土の
如く凍りついたツス。

「——それならばせめて、途中で食べる弁当くらいは作つてやらねばな。
丁度新作が出来上がった所だ……持つて行くといい」

「え、……………?」

一見完璧な軍人に思えるリヴァさんの唯一とも言っていない欠点がコレ……凄まじい破壊力を持つケミカル手料理を何かと振る舞おうとして来るんスよこの人。

ちなみにどのぐらい凄まじいかと言うと、あのエスデス様が数秒気絶するレベルツス。

——ちなみにアタシもその時食べたんスけど、一口で昏倒した上に数日間トイレの住人になったツス。

しかも本人はまるで自覚してない上に、動機は100%完全な善意……しかも断ると、滅茶苦茶落ち込むので、罪悪感も一塩……なので結局は食べちゃうんスよねー。

「おおっとおっ!!」 そういやそろそろいい加減体が冷えてきたから着替えに戻らねえとな!!」

「あ、そうそうボクもマスクの仕上げがあるからまた後でねー」

「む、そうか……それは残念だな。また機会があつたら振る舞わせて貰おう」

そしてアタシよりも被害を受ける機会の多いニヤウとダイダラさんの2人は、わざとらしい大声を張り上げながら信じられないような素早さでその場を後にしました。

しかもそれを信じちゃうリヴァさん……アナタ、人が良すぎるツスよ……。

「ち、ちなみに今日の材料は何なんスか？」

「——む、気になるかね」

「そ、そりやそうツスよー、リヴァさんの料理って中々に独創的ツスから、ひと目見ただけじゃ分かんなくって」

逃げ遅れたアタシは、なるべく機嫌を損ねないように、尚且つ今回の代物が辛うじて食べられるのか、食べられないものなのか、情報を少しでも掴みます。

これぞ隠密機動部隊で培った話術——!!

あ、ちなみに食べられないようだったら白兔の能力全開で逃げるツス。

「ふふ、そう言つて貰えるとは光栄だ。

……ただ今回は、従軍中だけあって、そこまで凝つたモノは作れなかったがね」

「そ、ソウナンスカー、残念ツスネー、アハハハ」

前半は嬉しそうに、後半は少し残念そうなりヴァさんに答えるアタシの言葉は、おそらくきつと、完全な棒読みだったでしょう。

でも、これは朗報ツス。リヴァさんが『凝つた』時、その破壊力は費やした時間に合わせて増大するツス。

つまり、あまり凝っていないという事は、それだけ被害が少なくなるという事——!!

「で、肝心の材料は——?」

「今日の材料は、マーグパンサーの骨のダシで煮込んだ、ツンドラトカゲのモモ肉だ。それをパンにサンドしてハンバーガーを作つてやろう」

——はいアウト。

「——ちなみに月兎つきうつ!!」

アタシは瞬時に白兎の力で宙を舞い、その場からダツシユで離脱したツス。

ちなみに解説しておく、マーグパンサーの骨は料理人曰く灰汁とエグみの製造機つて言われる代物で、ツンドラトカゲっていうのは、寒冷地に棲息する2級危険種で、体液は高級な湿布の素になるって言われてて……ちなみに味も湿布そのものツス。

んなモン食わされた日には、一発でダウンするのは目に見えてるツス。

リヴァさんには悪いツスけど、アタシもまだ死にたく無いので……。

そんな訳で、アタシはエスデス軍の拠点をグダグダなままに出発したのでした。

「むう、確かに重要な任務とは言え、あそこまで急ぐ事は無いというのに……相変わらず、せつかちな娘だ」

白兎の力で飛び立ったラヴィを見送りながら、リヴァは少し残念そうに呟いた。

実はラヴィに次いでエスデス軍の中では新参者の部類に入るリヴァであるが、彼自身は既に古参のように馴染んでいる。

その原因は、間違いなくあの純真無垢な少女のお陰であろう。

——無実の罪を着せられ、エスデスに拾われた直後の彼は、誰にも心を許す事が出来ず、当初はダイダラやニヤウに対しても一切心を開く事は無かった。

しかしそんな彼に、ラヴィはよく懐いた。

幼い子どもというのは敏感だ——荒々しい武人の気質を持つダイダラや、生来の残虐性を秘めたニヤウよりも柔らかな、リヴァの清廉潔白な性質を感じ取ったのだろう。

良く笑い、泣き、怒り……まるで感情のバーゲンセールのような彼女と交流する内に、リヴァの凍りついた心は解きほぐされた。

彼女がいなければ、今のように再び自分が軍を率いる事も無かっただろう。

……ただ、エスデスのみを盲目的に信奉する、悪鬼羅刹の類になっていたに違いない。

「そしてエスデス様もまた、変わられた……」

ラヴィを拾ってから、それまでただひたすら苛烈で冷酷、絶対強者として君臨してい

たエスデスも、その影響を受けつつある。

かと言って霸王の性質が弱まった訳では無い——それらはそのままに、しかし下の者に対する優しさ……言ってしまうえば鞭だけでは無く、絶妙なアメを与える才を開花させつつある。

もしそれが完全に花開けば、エスデスという存在は、更なる上のステージに登る事だろう。

——帝都で皇帝の傍に控えるブドー大將軍ですら、凌駕するほどの存在になるに違いない。

そして、影響を受けているのは何もリヴァやエスデスだけでは無い——残りの三獣士の2人もまた、そうだ。

ただひたすら最強という称号に固執していたダイダラも、人として致命的な歪みを持つニヤウも、大きく変わりつつある。

ダイダラはその戦闘スタイルと体格の大きさから、戦場においてはラヴィの露払いや

護衛を任される事も多い。

それ故に彼は、ただの猪武者から兵や周囲に気を配る事の出来る『将』としての片鱗を見せ始めている。

ニヤウは元大貴族の御曹司という立場と、天才的な能力を持っていた事から、対等に接する事の出来る存在がおらず、その血を好む性質に歯止めがかからなかつたという過去を持つていた。

が、エスデスの庇護という後ろ盾を持つラヴィは、唯一とも言つて良い対等な関係を持つ同年代の少女である。

彼女と交流する間に——未だに歪んではいるものの——ニヤウは人に対する正しい好意の現し方を身につけつつある。

「だからこそ……無事また会おう。お前は、我らにとつての宝なのだからな」

それ故に、リヴァは彼女の無事を祈つた。

こんな事を言つても彼女は必死に否定するであろうが、ラヴィは既にエスデス軍における同志の証である、四人目の『獣』なのだから。

(フツ……まだ帝国には、あのような有望な子供もいるのだ。

まだまだこの国も捨てたモノではないぞ)

「……なあ、ブラート」

最後の一言は、今は何処にいても知れぬ、何処までも一本気で、正義の心に溢れていた部下であり、友であった漢に向けて呟かれた。

「——それはそうと、このままでは折角の料理が無駄になってしまう……仕方無い。

少々量は少なくなってしまうが、兵たちに振る舞ってやるとしよう」

……台無しであった。

ちなみに、その料理を振る舞われた帝国兵達は、謎の病気を発症し、帝都へ向けて後送されていったという。

——数日後、アタシは帝都のうらぶれた裏路地の一画にあるあばら屋の前に居たつ

ス。

北からここまで来る間は、時々危険種に襲われそうになったりしたツスが、そこは流石の白兔——軽く逃げ切つて、ほぼ平穩無事にここまで辿り着く事が出来ました。

そしてここは、アタシの所属する隠密機動部隊が所有するセーフハウスの一つツス。一定のリズムでノックをすると、程無くして鍵が開けられ、一見すると髭もじやの浮浪者……けれど、良く見ればその視線はこちらの一挙手一投足に注がれ、身のこなしの一つ一つが訓練されたものだと分かります。

この人は隠密機動部隊に所属する一般兵の方ツス。

「お疲れ様です、ラヴィ隊長」

一応アタシの部下つて事になるので、恭しく挨拶してくる一般兵さん。

……最初は恐縮するばかりだったツスけど、今は大分慣れる事が出来たツス。

「——ご苦労様ツス。『あの人』、いるツスか？」

「はい——既にエスデス様からの連絡を受けて、昨日から待機しておられます」

「了解ツス、それじゃあこれから先は内密な話になるツスから、そろそろ上がつていいツスよ」

そう言つて、一般兵さんの手に給金代わりの銀貨が入った袋を手渡して、ご退出願ひ

ます。

勿論、この人はウラも取れてる信用出来る人なんすけど……一応、事情を知っている人間は限りなく少ない方が良いツスからね。

そして更に奥に隠された扉を開けると、そこには外見のボロさからは信じられない程に整った空間が広がっていたツス。

整然と並べられた、様々な言語で書かれた文書や密書の類、色々な人から押収した証拠品など……ここには後ろ暗いものから真つ当なものまで、帝国の様々な情報が詰め込まれているツス。

——その独特な空気を持つ空間の中に、1人の大柄な男性が座っていました。

「おお、これはこれは隊長殿……また会えて光栄だねえ。

こんなに早く戻って来たって事は、とうとうクビにでもされたのかい？」

トレンチコートに身を包んだその人は、何処か癖のあるネットリとした口調で鷹揚に挨拶してきました。

相変わらずの不遜な態度に、アタシは呆れ顔で溜息を吐いたツス。

「……いちいち聞かなくても『視れば』分かるでしょ。相変わらずいやらしい性格して

るツスねー」

「クククツ、悪い悪い……どうにも汚い心ばかり『視て』ばかりいるもんでねえ。

アンタみたいな真つ白で馬鹿正直な心は、つつい堪能したくなるのさ……愉快愉快」

「褒めても何にも出ないツスよー」

「……だが、悪い気はしないだろう？」

「まあ、否定はしないツスけどね」

綺麗に磨かれた歯を剥き出しにして笑うその人の額には、丸い瞳を象った宝玉が光り、それはギョロギョロとアタシの一挙手一投足を見つめているツス。

うーん……分かつてはいるんすけど、ジロジロ見られるのはあんまり好きじゃないツスねえ……。

「——おつと済まない済まない。コイツを使っているとどうにもクセが抜けなくてねえ」

まるで私の心を読んだかのように、肩を竦めるその人——いや、実際に心を『視て』いるんす。

それはエスデス軍が所有する最後の一つであり、洞視、遠視、透視、未来視……5つの『視る』力を自在に操る、瞳型の帝具——その名は、『五視万能』スペクテッド。

——そう、この人こそが、エスデス軍に所属する帝具使い最後の一人。

「はあ……まあいいツス。それよりも仕事ツスよ……ザンクさん」

「ククク、分かっていると……ナイトレイドか……中々に楽しめそうじゃないか……愉快愉快」

またしてもアタシの心を読みながら、かつて監獄で千の首を狩り続けてきた処刑人で

ある私の部下——ザンクさんは心底楽しそうに笑いました。

狸と兎と次なる任務

「では、こちらで暫しお待ち下さい」

帝都に到着した翌日、アタシはザンクさんとは別行動し、エスデス様に告げられた第一の用件を済ませるべく、帝都の中央に鎮座する城にて皇帝陛下に謁見すべく控えの間で待機していたっす。

謁見を希望する人間はかなりの数に及ぶみたいで、控えの間は老若男女様々な人達が待機しています。

ーしかし、ほぼ全員に共通している特徴がありました。

それは、権力、財産、名誉、肉欲……様々な欲望を求め、暗く澱んだ瞳と歪んだ笑み。

様々な方法で大臣や、皇帝陛下、側近の大將軍……この国のトップに位置する者達と、彼らの下にいる権力者達に、様々な方法で取り入り、甘い汁を吸おうと画策する、有象

無象の毒虫達の群れがそこにはいたつス。

……だからここにはあんまり来たく無いんスよねー。

毒気に当てられて、こつちまで腐りそうつスよ……。

しかもいくら今を時めくエスデス様も、序列で言ったら彼女も複数いる將軍の1人。

その率いる軍のいち部隊長なんて末席も末席——火急の用件と伝えてもかなり後回しにされて、その分長い時間ここにいるんで余計不快に感じるつス。

その上色々な香水とか体臭（これは主に丸々太ったおっさん達が原因つスね）が混じり合つて……うえ、気分悪くなりそうつスよ。

その最悪な空間から解放されたのは、約1時間後……名前を呼ばれる頃には、アタシは既に疲労困憊だつたつス。

……でも、これからが本番ツスからね。

ここで恥をかいしたりしたら、それはエスデス様に連なる人達が恥を搔くという事になるつスからね。

心の中で日頃お世話になつている人達を思い浮かべて気合を入れると、アタシは帝国の総本山たる場所へと足を踏み入れました。

くるぶしまで沈むんじゃないかって位上質な生地製の赤絨毯を進むと、アタシはその途中で跪いたツス。

「——面を上げよ。遙か北の地より、遠路はるばるご苦労であつた」

「はっ、お褒めに預かり、恐悦に御座います!!」

……あー、やっぱりこういう堅つ苦しい物言いは慣れないツスねー。

とは言つても、まかり間違つていつもの調子で喋ろうもんなら、一発で無礼討ちかまされそうツスから、我慢我慢。

心の中で愚痴りつつ、幼いながら威厳の籠つた声に顔を上げると、階段の上に鎮座する豪華絢爛な玉座に座る、まだあどけなさの残る顔の少年がアタシを見下ろしていたツス。

——もしかしたらアタシより幼いんじゃないかって位のお歳のこの御方こそ、この帝国の頂点たる皇帝陛下。

体格に似合わない、皇帝家に代々伝わる装束を身につけているせいで、何処と無くお遊戯めいた雰囲気を感じさせるツスが、そこから放たれる威厳とカリスマ性は凄まじいツス。

あのエスデス様でさえ、確かな忠誠心を抱いているのを見ても、つくづくそれが本物だと感じさせます。

「して、火急の用件との事であるが、如何なる報告であるのか申してみよ」
「はっ!!」

こういう時は、ハツタリを聞かせながら堂々と――。

陛下の言葉に一礼すると、アタシは大きく息を吸ってから、あらん限りの大きな声で、アタシは高らかに報告したツス。

「北の地に到着後、我らが主、エスデス様率いる我軍は破竹の勢いで快進撃を続け、先日未明、とうとう北の異民族達の本拠を制圧致しました!!」

敵の首魁たるヌマ・セイカはエスデス様が見事打ち取り……北の戦は、我ら帝国が完全勝利を飾りました!!」

——瞬間、玉座の間に控えていた諸侯達のどよめきが辺りに響き渡ったツス。

「——バカな!? つい先日出発したばかりだと言うのに……」

「話によれば、後一年はかかると言われていた筈だぞ!」

「流石はエスデス將軍……鎧袖一触とはこの事か……」

「あれで帝国最年少の將軍なのだろう? 未恐ろしい事この上無いな……」

畏怖と賞賛の入り混じったお偉いさんの言葉を聞いて、内心アタシは我が事のような嬉しきで一杯だったツス。

如何に恐怖の対象のように扱われていたとしても、心から尊敬する人が賞賛されているのを喜ばない人間はいなツスからね。

「おお……それは真か!! 長く続いた北の異民族達の侵略にもようやく終止符が打てよう……大義である!!」

「陛下直々のお言葉、光栄の至り……話が主もお喜びになりましたよ」

そしてそれは皇帝陛下のお言葉で最高潮に達したツス。

が——、

「やはりお前の助言通り、エスデスを彼の地に送り出した余の采配は、間違っていないかつたという事だな、大臣？」

「ヌフフフフ……それで御座いますよ、真に陛下は名君であらせられますなあ」

……直後に玉座の後ろから響いて来た声に、完全に霧散させられました。

現れたのは、太鼓のようにつぶりと肥えた体を引き摺りながら、この世で最も尊いと言われる場所で傲岸不遜にも手にした肉の塊を食べ散らかす老人。

たつぷりと蓄えられた髭が彩る口は、常に歯を剥き出しにしながら禍々しく弧を描き、細められた目の奥の光は、この世の全ての汚濁を集めたかのように淀んでいたつス。

——コイツこそが、帝国の腐敗の大元凶にして、皇帝を意のままに操り、権力を振るう佞臣の巨魁……大臣オネストツス。

「エスデス將軍のご活躍に、陛下も非常にお喜びです——今後もどうか、帝国の発展に寄与して頂きたいものですねえ」

「……ありがとうございます」

言葉こそ丁寧ツスが、その一言一言にはこちらを探るような毒が込められているツス。

それに当てられて、思わず顔を顰めそうになりながら、アタシはどうにか頭を下げました。

「又フッフッフ、帝国に仇なす者達を排除出来た事は誠に喜ばしい……是非エスデス將軍には華やかに凱旋して頂き、帝都の民達を鼓舞して頂きたいものですなあ」

来た——アタシは拳を一層強く握りしめ、流れ出そうになる冷や汗を必死に抑えたツス。

何気ない一言に見えるツスけど、十中八九、これは次に主張すべき言葉への布石に違ひありません。

「——勿論、その褒美として次なる獲物も用意してさしあげましょう。」

エスデス將軍の血の滾りを鎮めるに相応しい相手ですよ、又フッフッフ」

そして、それはその通りだったツス——エスデス様が危惧していた通り、大臣は既に次なる相手を用意していたようツスね。

——でもつスね、確かにエスデス様は強い敵をこそ望んではいるツスけど、それを理由に外道共の走狗になるつもりなんて更々無いんスよこのクソ狸。

内心で大臣に向かってアツカンペーしてやったツス……つまり、もうアタシの覚悟は完了済み!!。

ここからが正念場ツスよ——!!

「——お言葉ではありませんが、大臣閣下。

現在エスデス軍は各地に潜った残党の処理を行っており、それらの掃討が完了するまでは、帝都に戻るのは今暫くお待ち頂きたい……との言葉を、話が主、エスデス様から承っております」

「——ほほう?。」

その言葉に、大臣の上機嫌な笑みが一瞬だけ固まり——同時に、奈落の穴のような眼光がアタシに向かって放たれたツス。

「……………?!」

その瞬間、アタシはまるで自分の足元が底無しの毒沼にはまり込んだかのような錯覚を覚えたツス。

エスデス様の眼光が氷の刃とするならば、大臣のソレは、まるでこちらの心を見透かしながら、黒く染め上げようとする悪魔の吐息。

ついさつきした筈の覚悟が、あつという間に折れそうになるのを感じます……ヤバい、膝が震えて来たツス。

「これはこれは、天下に名だたるエスデス軍にしては珍しい慎重っぷりですねえ。

それに何より、あのエスデス將軍が、抵抗出来る程度の敵を取り逃がすとは……これまた珍しい事です」

「……………」

こちらを挑発するかのような言葉を並べ立てる大臣に、思わず漏れそうになる言葉のアタシはどうか抑える事に必死だったツス。

ここで何か下手な事を口にすれば、それを手がかりにコイツはこちらの弱みを握って来るんすから……。

「——はい、敵ながらに天晴と、エスデス様も仰っております」

「フムフム……流石は噂に名高い北の勇者。一筋縄とはいかなかったようですねえ」

……まあ実際は芥呼ばわりだった上に、粉微塵にされたんすけど、そこは方便つて奴ツス。

アタシの言葉に、大臣はわざとらしく頷きながら、大臣は再び肉を一欠片食い千切り、咀嚼して飲み下すと、でつぶりとした体を引き摺るように、こちらに向かつて歩み寄つて来たツス。

そして腰を折り曲げ、こちらの顔を覗き込むように見下ろします。

「……ですが、最早彼らはその英雄を失っています。つまりは烏合の衆も同然です。

そのような奴らに時間を割くのは、無益なように思えるんですがねえ？」

そして、近づかれるという事は纏わりつくような圧力も強まる事に他ありません。

喉がカラカラに乾いて、息が上手く出来ないせいで、頭がぼうつとしてくるのが分かるツス……ダメツス、気をしっかり持つツスアタシ。

どうにか混乱しそうになる頭の中を必死に落ち着かせ、次なる言葉を間を置かずに言い放つたツス。

少しでも隙間を開けてしまえば、それだけでもコイツの前では致命的に成り得るツス

からね。

「——っ……大臣も、エスデス様の気性はご存知の筈。

あのお方は、例え蠅螂の斧であったとしても、徹底的に帝国にとつての脅威を根絶やしにしなければならぬと思っております。

それこそが皇帝陛下の御為にもなる、と」

「それは何とも天晴!! 正しくエスデス將軍こそ帝国でも随一の忠臣と言つても過言ではないですぞ」

「あ、ありがとうございます」

「——しかしですねえ……」

にっこりとした笑みを浮かべる大臣——けれど、次に続いた言葉に、アタシは冷水を浴びせかけられたような錯覚に陥ったツス。

「——そんなエスデス様の忠義は有り難いのですが……次なる敵もかなりの脅威ですねえ。」

何せ、皇帝陛下がおわす帝都のお膝元で、不埒にも暴れまわる凶賊共なのですから」

「——っ!?!」

やって……しまったツス……!!

アタシの発言に粗を見つけるや否や、大臣は一気にまくし立てて来ました。

「遙か北に隠れる敗残兵と、陛下の喉元にいる一騎当千の凶賊……聡明なるエスデス將軍の配下である貴方ならば、どちらがより脅威か、お分かり頂けるのでは無いかと思うんですがねえ？」

「それ、は……」

大臣が言うように、冷静に考えてみれば、それは子供でも分かる理屈だったツス。

そんな事にも気付かずに迂闊な発言を……っ!! 数分前の自分をぶん殴ってやりた
いっす……っ!!

あまりの悔しさに、思わず拳を堅く握り締めるツスが、そんな事しても状況は好
転しません。

「……そんな訳ですから、エスデス將軍にはどうか早急に、帝国に帰還して欲しいのです
よ。」

これは皇帝陛下もお望みの事——それがどういう意味かはお分かりですか？」

「……………はい」

嫌味たっぷりな言葉に、アタシは項垂れたまま答える事しか出来なかったツス。

反論出来ないアタシに満足したのか、幾度も嫌らしく頷きながら、大臣は勝利宣言をするかのように、玉座の間に響き渡るような声で宣言したツス。

「それでは、エスデス將軍には一刻も早く帰還して頂きませんとなあ！」

貴女の白兎の力があれば、このような些細な連絡もすぐに届きますし……では早速、書記官に命令書を——」

悔しさと、怒り……それ以上に、尊敬する人から命じられた事を果たせなかった悲しさが、アタシの頭の中を駆け巡っていました。

——エスデス様……ゴメンなさいっス……!!

「——そこまでだ、オネスト」

涙が溢れそうになった瞬間、予想外な助け舟が玉座の間に現れたっス。

重々しい鎧の音を響かせながら、どんな豪胆な兵士でも震え上がるような眼光を持つその人が現れた瞬間、周囲の空気が一気に重さを持つてのしかかってくるような威圧感

が場を支配したっス。

「……これはこれは、貴方が謁見の場に参加するとは珍しい事もあるものですなあ」
「何、久々に執務が早めに終わったのでな……もののついでだ」

一瞬忌々しげに口を歪めながらオネストが慇懃無礼に挨拶すると、その人もまた眉根の皺を一層深くしながらそれに応えたっス。

彼の名はブドー……帝国の軍事におけるトップであり、この国で最大の武力を持つ大將軍っス。

そして、正直アタシは驚きが隠せなかつたっス。

何故ならこの人は「武人が政治に口を挟むべきでは無い」という信念の下、こういった場所には滅多に姿を見せず、もっぱら近衛兵の練兵か、軍事関連の命令書とかの決済……または、自ら出撃していたりするものが殆どなんスよね。

そんな人がこの場に姿を現し、その上ほぼ同格であるとは言え政治的な決定をしようとした大臣を押し留めるなんて、少なくともアタシは一度も見たことが無かったツス。

驚いて、呆けた顔をしたままでいると、ブドー大將軍がこちらに目を向けたツスが……チラリ、というよりギョロリと言った感じなので、恐怖の対象がただ単に大臣からこの人へ変わっただけのようないツスがしてしようがないツス。

やっぱ死ぬほど怖いツスこの人……エスデス様も怖いツスけど、この人の雰囲気にはどうにも慣れないスよね……。……。

周りにいた諸侯の方々もそうなのか、ヒソヒソ声も出せずにチラチラと視線を向ける事しか出来ないみたいツス。

「おお、ブドーではないか。忙しいとは聞いていたが、もう良いのか？」

「はっ、各方面からの報告を纏めておりましたが、ひと段落ついたので、無礼ながら遅れて参上致しました。」

……申し訳御座いませぬ」
「構わぬ。」

「軍事の事は細かには分からぬが、お前ほどの者が時間をかける事なのだ——余人には真似出来ぬ大業である事を、余は理解しておるぞ」

「勿体無きお言葉——」

そんな中、誰もが声を失うような存在感を放っている彼に、皇帝陛下は普段通りに挨拶を交わしたツス。

……慣れてるんでしようけど、やっぱり凄いつすこの御方。

ホントに大臣なんかの影響受けてなけりや、確実に名君として名を馳せたでしょうねえ……。

「オツホン!! 陛下、挨拶はその辺にして頂いて——にしてもブドー大將軍？」

いきなり久々に現れたと思つたら、これまたいきなり私の話に割り込んで来る……一体どういふ見なんでしょうねえ？」

そんなアタシの思考は、大きく咳払いした大臣によつて引戻されたツス。

そうツス……まだアタシの危機は去つてはいないんすよね……。

「どうもこうも無かろう。確かに私は政治には関わるつもりは無いが、それが軍事に関わる事ならば話は別だ」

そう言うのと、ブドー大將軍は一枚の羊皮紙を懐から取り出したツス。

つい先程開封されたのか、その端の部分には紋章の押印された蜜蝋の跡が残っているツスね……つてアレ？

あの紋章、何処かで見たとような……？

「つい先程、北のエステス將軍からマーグファルコンによる文が届いた。

それによれば、先日彼女らが討った北の勇者は影武者の可能性があるため、更に徹底した残党狩りを行いたい、との事だ」

あー、やっぱりウチの軍の紋章でしたかー、道理で見たことあると思つたツスよー。

……つて、えええええええつ!?

ん、んな情報聞いて無いツスよ!? ど、どどどどどどういう事ツスか!?

あの粉微塵になったイケメンさんが影武者!?! でも、あの槍捌きはホンモノでしたし、そんな事ある訳……!?!

「んん……? それは真ですかなあ? どれどれ少し拝見……」

そんなアタシの動揺を他所に、大臣がブドー大將軍から羊皮紙を受け取ると、何度も何度も読み返したツス。

「ふむ、どうやら本物のようですね……しかし、影武者ですか……これは確かに厄介ですなえ」

「ふん……確かに厄介だ。何せ、いるかどうかも分からんのだからな」

しかし、ブドー大將軍の何かの含みを込めた言葉を聞いて、ようやくアタシはその手

紙の意図に気付く事が出来たっス。

——これは、エスデス様の策に間違いないッス。

恐らく、あの方はアタシが大臣に言いくるめられてしまう事を考え、あらかじめ保険をかけておいたんス。

アタシが発する何日前に、あらかじめ文をしたためたマーグファルコンを飛ばしていたんでしよう。

手紙の内容は……恐らく嘘八百に違いないッス。

けれど、各地に散らばった残党の中に、ヌマ・セイカさんの影武者か、はたまた本人がいるのか、それともそんな情報は真つ赤なウソなのかは、実際にその全てを虱潰しにしないや誰にも分かりません。

……所謂、悪魔の証明って奴ッスね。

そして、今までの北の異民族が長年帝国を苦しめてきた最大の要因は、あのイケメン

さんだった事を考えれば、もし仮に影武者であろうと、彼の姿をした存在のそのものが、神輿になる可能性も否定出来ないツス。

つまりは――、

「――故に、エスデス將軍にはこのまま北に残つて貰う。

このまま軍を退いては、再興されてしまう可能性もあるからな……その芽の全てを摘み取る事を考えれば、最も適任なのは誰かは、貴様でも分かるだろう、オネスト」

「ふむ……そうですね。では、そういう事にしておきましょう」

「ああ、そういう事だ」

「こういう展開になるツスよね――まあ、2人ともどうやら気付いてるみたいツスけど。」

ただ、現場の判断が優先されるような事態である以上、軍事のトップであるブドー大將軍と政治のトップである大臣のどちらの判断が優先されるかと言えば、確実に前者に軍配が上がります。

そして、大將軍は外患の敵を優先して叩く主義――エスデス様が支持される可能性は高いツス。

結果はご覧の通り、ほぼエスデス様の思惑通りで万々歳なんスけど……。

……うう、思惑通りになったとは言つても、アタシの預かり所の知らない場所で行われた事なんで、イマイチ釈然としないツス。

まあ、結果オーライなんでそれはそれで構わないんすけどね。

そして、しばらく大臣と大將軍、何人かの文官がやり取りを交わし、陛下がそれを承認する事で、エスデス様の北方残留は正式な決定となつたツス。

これで取り敢えずは、アタシのメインの仕事は終わりました——後は……、

「——ラヴィ・ラズトン。退出後この文について多少聞きたい事がある。後で執務室に
出頭するように」

「は、はいっ!!」

……ブドー大將軍への説明ツスね。

正直、大臣と相對するのと殆ど変わらない位怖いんすけど、今の所はエスデス様サイドに立つてくれてはいる人なんで多少はマシツスけどね。

溜息を吐きそうになるのを何とか我慢して、アタシは再び玉座の陛下に向かつて一礼して退出し、今度はブドー大將軍の執務室へと急ぐのでした。

一刻ほど経った後、アタシはブドー大將軍の執務室にいました。

「——ご苦労。そこに掛けて良い」

「は、はははははいッス!!」

大將軍の言葉に、アタシは声を震わせながら質素な椅子に腰掛けたッス。

周りを見回すと、本当にここは城の中なのか？つて位質素で、それでいて無骨な部屋ッス。

四方の壁には様々な方面の戦場の状況を書き記された地図が並び、書棚には埃や泥、血のようなシミに塗れた命令書の束——恐らくは、戦場から送られてきたモノっスね——が、所狭しと整然と並べられているッス。

使い込まれた執務机と椅子、それから客人を応対するのに必要最低限の椅子と机、大將軍のトレードマークたる紅い板金プレートメタルの鎧掛けが置いてある以外は、私物の類や、装飾品は一切無し。

正に軍事関係の仕事を行うためだけに誂えられた空間って感じッスね。

「——いつもながらに思うのだが……貴様の主は、もう少し自らの意図を隠す事を覚え

てはくれんのか？」

「は、はあ……面目無いツス」

「まあ、貴様に言つても仕様が無い事ではあるが……フォローするこちらの身にもなつて貰いたいものだな」

「ぐ、ぐめんなきいッス」

開口一番、ブドー大將軍はこめかみを揉みほぐしながら、大きく溜息を吐いたツス。

謁見の時と比べれば、大分砕けた態度ツスけど、相変わらずその威圧感健在——アタシはただ縮こまる事しか出来なかつたツス。

「——ただ、奴の気性があの程度の敵で収まるとも思えんし、昂ぶりを抑えられるやも知れぬ敵に対して、慎重に吟味したいという奴の意図も理解は出来る……今回は不問としよう」

「あ、ありがとうございます!!」

その言葉に、咄嗟に立ち上がり、頭をガバリと下げるアタシ。

それに対してブドーは手をひらひらと振って自分に着席するように促したツス。

「勘違いするな。貴様の2つ目の任務が、我々近衛にとつても有用だと判断したまでだ。

エスデス將軍の独断専行自体を許した訳では無い——それをくれぐれも、奴に伝えておけ」

「り、了解しましたッス……」

再び鋭い眼光を飛ばされて、またしてもしおしおと萎びるアタシ……こういう自分の性分、時々情けなく成るツスねえ……。

——でも、いつまでもこんな感じじゃいられないッス。

アタシは自分の心に喝を入れると、背筋を伸ばしてブドー大將軍を見据えて口を開きます。

「——で、アタシは今回の見返りに何をすれば宜しいッスか？」

アタシがここに呼ばれた訳は、何も説教されるためじゃ無いッス。

あの厳格なブドー大將軍が、そんな事のためにわざわざ時間を作る訳が無いッスからね。

という事は、今回の件にかこつけて、隠密機動部隊であるアタシに用があるという

事ツス。

「ふむ……やかましく逃げ回るばかりだったあの小娘が、中々どうして立派に育つたものだ。」

エスデスにも、意外な才能があつたと見える」

そんなアタシを見て、一瞬だけブドー大將軍の顔が綻びます——時々こういう表情するからズルいんすよね、このツンデレおじ様は。

小さい頃は、そんな小さな優しさにすら気付けないで、顔見た瞬間泣き出しながら逃げまわったモンツス。

「まあ、ある程度一丁前に育たなきゃ、今頃死んでるような環境だったツスからね……これぐらいは」

けど、昔を懐かしむのはほんの一瞬——再びブドー大將軍は普段の厳しい表情に戻り、アタシに告げました。

「——ならば話は早い。」

一つ目の条件は、かの凶賊——ナイトレイド共に関して集めた情報を、我々にも提供して貰いたい」

これは容易に想像が付くツスね。

——帝都にも、数多くの警備兵や衛兵が控えているツスが、ごくごく一部を除けば、その実力は各方面に派遣された兵士達と比べれば数段劣るツス。

城には精鋭中の精鋭である近衛兵が控えてはいるツスけど、彼らの本文は陛下と城の警備なので、いちいち賊のために出動させる訳にもいきません。

そのため、ナイトレイド達が凶行に及んだとしても、彼らのような強力無比な帝具使いを撃退したり、捕縛したりする事はおろか、その影すらも掴めない事が殆どツス。

その上、僅かな目撃情報に、噂話やホラ話の尾ひれが付いて、その実態は完全に闇の中……こんなんじゃ、討伐なんて満足に出来る訳が無いツスよね。

「了解したツス——近日中に、部下の人達に現時点での報告書を纏めさせるツス。定時報告の日時と場所は後ほどって事で」

この条件を、アタシはすぐに頷いて受け入れたツス。

情報を提供するっていう事は、それらを共有するって事で、その方がこちらでも動き易いし、こちらの得られる情報もその分多くなるツスからね。

「——2つ目は、帝都の中での案件に力を貸して貰いたい。

警備兵や衛兵では手が出せず、こちらの諜報部を回そうにも、今は前線の動きを把握するのに手一杯でな……」

……これは、ちよつとアタシにとつても予想外の条件でした。

まあ手が回らない所を手伝ってくれて事なんでしょうけど、帝具使いを2人擁する部隊にわざわざ頼むつて事は、100%厄介事つて決まつてるツスからね。

「ん……それに関しては、モノによるツスねえ……ちよつと、見せて貰つても良いツスカ？」

ブドー大將軍が差し出した資料を見ると……それは、最近の帝都の門を通過した、地方から上京してきた人達の目録だったツス。

帝都の城壁の中に入る以上、例え帝国民と云えども入国審査みたいなものがあるツス。

ただ滅茶苦茶人数が多いんで、ちよつとした身元の確認や、帝都に来た目的等を聞かれた上、書面に名前を登録する……つて感じの軽いヤツツスけどね。

これはその一部のようなツスけど……見れば、所狭しと書かれた名前の多くに、赤い線が引かれていたツス。

「これは？」

「——登録後に行方が分からなくなった者達だ」

ひー、ふー、みー……見ただけで、ざっと2、3割の人間がいなくなってるって事ッスね。

「でもコレぐらい普通じゃ無いッスか？」

地方から来たお上りさんが、騙されたり、金巻き上げられたり、もしくは食い詰めて飢え死にするか、スラム街の住人に……なんて事、今の帝都じゃ当たり前じゃ無いッスか」

残酷だとは思いうッスけど、コレが今の帝都の現状ッス——中央が腐敗し切っていると
いう事は、その末端も同じこと。

そんな帝都の実情を知らない、夢と希望に溢れた者達を骨の髄までしゃぶり尽くそうとする輩は、ゴマンといるッス。

……中には、警備兵とか衛兵にも、そういった奴らの片棒担いで奴らもいたりするッスから、世も末ッスね

「——その通りだ……嘆かわしい事ではあるがな」

一瞬、陽炎のように怒りを滲ませるブドー大將軍……この人もよく誤解されるツスけど、陛下と、この帝国を真剣に考えている人なんスよね。

ただ、他にやる事が多すぎて、その手を差し伸べられないだけなんスよ。

「それだけならば、私もいつもの事だと、衛兵や警備兵にそういつた事案の防止を命じるだけだっただろう。」

……だがそれに、上級貴族が関わっているとしたら、どうだ？」

そう言うと、ブドー大將軍は新たな羊皮紙をアタシに向かって差し出したツス。

それは、警備兵から提出された報告書だったツス。そこには——、

「——クローゼル家ツスか……帝都でも有数の財産を持つてる上級貴族事ツスね」

「……報告によれば、かなりの数の地方民の人間が、彼らに施しを受けた上で、屋敷に招かれていったらしいが——」

「その殆どが、再び門から出て行った形跡が無い、と……」

ブドー大將軍の言葉を引き継ぐように、アタシは資料を見ながら思わず呟いたツス。

何スかこれ……何処からどう見ても真つ黒じゃないスか。

恐らく親切にかこつけて、中で色々や^つてるんでしようね……。

「——警備兵や衛兵じや、権力が違いすぎて手が出せず、官憲を動かそうにも、金を掴まされてるのか、ロクに動かないかおぎなりの調査でお茶を濁されるつて所ツスカ」

「その通りだ……コレ以上は、させんがな」

ミシリ、と音を立てて、一枚板で出来た執務机の天板がひび割れます——怒りのあまり、力を込めすぎたみたいツスね。

アタシとしても、気に食わないツス——外道なら外道らしく、堂々と振る舞つていれ
ばいいんすよ。

いちいち善人ぶるなんて、やり方が小さいツス。

「状況証拠は掴んでいる——後は、直接的な証拠のみだ。貴様には、それを掴んで貰いた
い」

「了解ツス。じゃあその間、ナイトレイドの調査はお任せするツス」

「承知した」

手短にそれだけ告げると、ブドー大將軍は羊皮紙にサインすると、こちらにそれを差し出したツス。

——これで、この一件はブドー大將軍からの正式なお墨付きを貰った事になるツス。

つまりは、ある程度ならば彼の裁量で許されるって事ツス——どんな手を使ったとしても。

ブドー大將軍からの執務室を退出し、城から出て、セーフハウスに戻る途上——アタシは周囲に誰もいなくなったのを見計らって、口を開いたツス。

「——概要は大体『視た』ツスよね。ナイトレイドの調査の前に、ちよつと一仕事ツスよ」
「ククク……了解。ここ最近は温い仕事ばかりで腕が鈍っちゃまってねえ……久々に錆を落とせるって訳だ——愉快愉快」

すると、路地の暗がりから、すうつとトレンチコート姿の男——ザンクさんが現れたツス。

頭の中を覗かれるのは好きじゃ無いツスけど、こういう秘密裏に事を進めたい時は便利ツスよね、スペクテッド。

「——で、どういった策をお考えかな？ 我らが隊長殿は」

「……わざわざソレ聞くんスカ」

「直接聞いた方が面白いだろう……愉快愉快」

「コンの……!! 刑務所でヘタれてた時に励ましてあげた恩を忘れたツスか……!!」

でも、この人の人格は好きになれないツス……!!

アタシが頭の中で考えてたけど、絶対にやりたくなかった策を『視た』上で、アタシがそれを口にするのを完全に面白がってやがるツスよコイツ!!

「そういうアンタも、公園の噴水みたいに反吐をぶち撒けてたじゃあないか……お相子つてヤツだろう?」

「ぐっ……まあいいツス……今回は——」

そして、顔を真っ赤に染めながら告げたその内容に、ザンクさんが示した反応は——
爆笑だったツス。

「クハ……クツ……ハハハハハハツ!! それはいい!! 傑作だなあ!! 愉快愉快!!」

これは三獣士やエスデス様にもいい土産話が出来るつてもんだなあ、愉快愉快!!」

「ええええええいつうるさいうるさいうるさいツス!!」

悔し紛れに白兎の脚甲で思いつき蹴ってやるツスけど、スペクテッドの力で難なくかわされて無駄に終わります。

このっ……!! 八つ当たりすらさせてくれないンスかあの帝具……!!

「おつと危ない危ない。そんなに恥ずかしがる事なんか無いだろう? いい策じゃないか、ククク」

「ぐっ……うううううう!!」

……でも、彼の言う通り、恥ずかしいけどかなり有効なのは間違いない今回の策。

ザンクさんへの怒りをどうにか抑えながら、アタシの頭は今回どう立ち振る舞うかを考えます。

——でもその時アタシはその事に関して頭が一杯で、この一件が今後の人生を左右する一幕になるとは、夢にも思っていなかったツス。

「ふえー、ここが帝都ツスカ〜……でつかいッスね〜……それに人が一杯ッス……」
帝都の中央に位置する噴水広場に、体をボロのようなマントで覆った小柄な少女の姿があつた。

背中に背負つた中身のパンパンなりユツクのせいで、余計に小さく見える。

肩辺りで切り揃えた癖のある黒髪をたなびかせ、同じく黒い瞳を目まぐるしくキョロキョロとさせながら、ソバカス混じりの顔を輝かせるその様子は、正しく田舎から来た世間知らずのお上りさんといった風情だ。

「——ねえ、そのの貴女？」

そんな彼女に、突然声が掛けられる——振り向くと、そこにはひと目で上質と分かるドレスに身を包んだ、ウェーブのかかった金髪を持つ上品そうな少女が立っていた。

その傍らには屈強な護衛が控え、背後には豪華な飾りのついた馬車——明らかに貴族、それもかなりの上級の家柄だ。

「へ？ ひ、ひえっ!? き、貴族様がアタシに何か用ッスカ!?!」

「ふふ、そんなに驚かないでもいいわ——貴女、地方から上京してきた旅人でしょう？」

「ええっ!?! ど、どうして分かるッスカ!?! も、もしかして超能力者……!?!」

「あははっ、違うわよ——貴女の様子を見れば、すぐに分かるわ」

そう言つて微笑むと、少女はスカートの裾を摘んで優雅に一礼する。

「私はアリア——貴女が良ければ、私のお屋敷に招きたいのだけれど、宜しいかしら？」
「う、うええっ!? あ、アタシが貴族様の!? いやいやいやいや!! そんなの恐れ多いッ
ス!!」

唐突なアリアと名乗る彼女の言葉に、ブンブンと頭を振る少女——だが、それを傍らにいた護衛がとりなす。

「アリア様はお前のような旅人から話を聞くのを大層気に入られているのだ」

「ここは、お言葉に甘えておけ」

「そ、そうなんスカ……? じ、じゃあお言葉に甘えて……」

——その瞬間、アリアと少女は人知れず微笑んだ。

それは奇しくも、同じ感情によつてもたらされた笑み——即ち、獲物を捉えた捕食者の喜色だった。

（——さあ、仕事の時間ツス）

（——さあ、楽しい宴を始めましょう♪）

そして、その様子を全く別々の遠くから見つめる二組の影。

「ククク……さあて、久々の外道の首斬り……楽しみだねえ、愉快愉快」

し、
路地裏からかつて首斬りと言われた男が、額の瞳を怪しく光らせながら舌なめずり

「ターゲットがまたお上りさんをゲット……つたく、今日で二人目だぜ？

欲張り過ぎだつっの……どうする？」

建物の屋根の上から金髪の、野性味溢れた美しさを持つ豊満な女性が、傍らに控える禍々しい意匠を施された長刀を携えた黒髪の少女に問い掛ける。

「——彼女には悪いが、私達の動きに変更は無い」

女性の言葉に、少女は冷徹に、淡々とした声で答える。

「夜まで待つて皆と合流しだい……」

「
葬る
」

——長刀の鯉口が、少女の決意を示すかのように静かに切られた。

帝国最後の動乱、その切っ掛けとなった邂逅まで——あと、6時間。

首を刈る者達

「ふうく……取り敢えずは一段落つスねえ」

上品そうな磁器製のティーカップに淹れられた紅茶をフウフウと冷ましながら、アタシはボソリと呟いたツス。

——ここは、帝都郊外の高級住宅街に建てられた大豪邸。

その中にある良く手入れされた中庭に、今アタシはいるツス。

そしてアタシの向かい側には、げっそりとしながらテーブルに突っ伏す、ボサボサの茶髪の男の子がいました。

「ああ……そーだな。全くあのお嬢サマ、いくら何だつて買い物分量多すぎだろ……」
「アハハ、しかしタツミ君も災難だったツスねえ」

彼の名前はタツミ君——田舎者を装って屋敷に潜入したアタシの前に、この屋敷へと招かれた地方出身の少年っス——って言っても、年の頃はアタシと同じかちよつと上く

らいつスけど

何でも幼馴染2人と一緒に帝都で一旗上げようと旅をしていた所を、野盗に襲われて散り散りになり、その上兵士の志願を断られ、直後に綺麗なお姉さんに騙されて有り金全部無くしてしまつたらしいツス。

……まあ、本人が世間知らずつて事を加味しても、可哀想になるぐらいのズタボロつぶりツスね。

そして、行き倒れになりそうな所をここのお嬢様に拾われて、一晩休んだと思つたら一日中、屈強な護衛のオツサン達がドン引きするレベルの大量の買い物に付き合わされた訳ツスから、彼が疲労困憊になるのは無理も無いと思うツス。

——え？ アタシはその間何してたかつて？

あつはつは、何言ってるんすか。か弱いアタシが荷物持ちなんてする訳無いじゃないっすか。

まあ、サボる前にタツミくんがアタシの持つ分まで引き受けてくれたんでどっちにし

ろ楽出来ましたけどね。

「でもまあ、そこらで行き倒れるよりかは大分マシなんじゃないツスカ？」

「んな事言つてもさあ……うう、最初は地獄に女神だと思つたのに……」

そう言つて再びテーブルに突つ伏すタツミ君……まあ、ここで行われてる事を考えると、地獄の上塗りなんすけど。

——尚もグツタリとしつつも愚痴り続けるタツミくんを慰めつつあしらいながら、アタシの思考は今まで集めた情報を整理する作業に入っていました。

タツミくんは気付いて無いようツスけど、やっぱりここには何かがあるツス。

その根拠としては……まず第一に、地方から来た旅人の保護つていう慈善事業——つーか、個人の趣味的なモンツスけど——の評判の割には、人が少なすぎる事。

アタシ達の以前にここに来たつていう人もチラホラいたので、その人達に聞いてみたんすけど、翌朝に起きてみたら先客の姿が無くて、このの主や使用人に行方を聞いたたら、『朝早くにここを発つた』つて答えが帰つて来たツス。

まあ、それだけなら『ここに旅人が泊まれるのは一日だけなのか』と思うだけなんす

けどね……問題は、その事を話してくれた老夫婦も、その話と同じく朝には姿を消していた事ツス。

『ある程度の目処が立つまではお世話になろうかと思う』って言ってたツスから、一日限りつていうのは考えられない以上、あの人達には何かがあったと思う方が自然ツスね。

そして第二に、事前にザンクさん達に調べて貰った、この屋敷に入っていた旅人達の数に比して、彼らのような身分の者達が泊まるに相応しいランクの部屋が、あまりにも少ない事。

いくらこの屋敷が広いとは言え、この主である者やその専属の家令や使用人が暮らす本邸は、大貴族を名乗るに相応しいレベルの客間しか存在しません。

そんな所に、下手したら月レベルで入浴やら水浴びやらの体の手入れをしていない人間を泊める酔狂な貴族がいるか、と言われたら、普通は否、と言わざるを得ないツスよね。

一応下級の使用人が住む離れなんてのもあるツスけど、あくまで庭園の景観を損なわない程度の必要最低限レベルのもの……その気になれば不可能じゃ無いんでしょうが、元いた人達を圧迫してまでやる意味が無いツス。

そして第三は……笑われるかもしれないツスけど、『勘』ツス。

根拠は無いツスけど、アタシの第六感……分かり易く言えば、臆病者センサーが脳に警鐘を鳴らしてます。

普通だったら鼻で笑い飛ばされるような感覚ツスけど、アタシはコレに従って何度も危機から脱したり、生き延びたりして来ましたから、以外と馬鹿に出来ないモンなんですよ？

そんな事を考えながら、ようやく程よく冷めてきた淹れたての紅茶を一啜りして——その瞬間、アタシは自分の直感が正しかった事を知ったツス。

(はあ……何とまあ、そこらの兵卒の給料吹っ飛ぶような高級茶葉に、無粋な味付けカマしてくれるツスねえ……)

……こんなモノを客人に振る舞うなんて、とんだ慈善事業があつたものツス。

独特の苦味を持つその味に少しだけ顔を顰めながら、アタシはそんな事を思いました。

まあでも、これで話は半分早くなったツス。

後は第三者にも分かる決定的な物的証拠を得る為のお膳立てを済ませるだけなんスけど……目の前にいるタツミ君を巻き込むのも忍び無いし、結局は夜を待つての行動になりそうツスね。

「ところで、ラヴィ……つつつたつけ？ お前良くそのお茶飲めるなあ。

——帝都つつーか、貴族サマの間じゃこれがお上品な味なのかもしれねーけど……悪イけど口に合わねーわ」

そんなアタシの思考を知ってか知らずか、タツミ君はその『お膳立て』の為の小道具を指さしながら、うげーっと舌を出しながら顔を顰めたツス。

多分、野生の勘ってヤツなんでしょうか、彼は目の前にある紅茶に入った味付けを、不快な味として認識してるみたいツスね。

まあ、一口でどうこうなるようなモンじゃないので、大丈夫でしょう。

「——そうツスか？ 慣れたら結構オツなモンツスよ？」

アタシはそんな彼へと得意げな笑みを浮かべながら、痺れ薬入りの紅茶を再び口にし

ます。

（——取り敢えずこっちはそれなりに順調つと……後は、外のザンクさん次第ツスね）
そして、恐らくは帝具の力でこちらを伺っているであろう、ムカつくけれども頼りになるアタシの部下に向かって、周囲に気づかれないように小さくウインクしました。

——屋敷の中にいるラヴィの予想通り、その合図の様子をザンクはスペクテッドの能力である『遠視』によって捉えていた。

「ククク……了解、と。普段はビビりな割には随分と肝が座ってるねえ、我らが隊長殿は」

愉快愉快、と楽しげに独り言ちながら、高級住宅街を見下ろす教会の鐘楼から再び辺りを見回す。

そこには一面、良質な大理石や煉瓦で築かれた、美しい貴族たちの邸宅が広がっている。

一見すれば華やかに見えるが、かつて彼らに体よく利用され続けた経験のあるザンクからすれば、着飾った糞の山にも等しい程に不快だった。

——そしてその間に伸びる綺麗に舗装された道を歩くのは、同じく無駄に豪華に着飾った、張り付いたようなヘラヘラとした笑みをだらしなく浮かべる屑の群れ。

そんな彼らを見る度に、ザンクの中に昏い衝動が沸き起こるのだ。

嗚呼、首を刎ね飛ばしてやりたいと。

「——おっと、いけないいけない……一々易きに流れそうになるのは、俺の悪い癖だねえ」

限界まで吊り上がりそうになる口を手で抑えながら、ザンクは相変わらず制御し辛い己の気性に苦笑する。

恐らくラヴィに出会い、エスデスの庇護下に入らなければ、きっと彼は道行く人々の首を無差別に刎ね落とす殺人鬼と化していただろう。

——ザンクの生家は、代々続く処刑人の家系だった。

一般人からは忌み嫌われる日陰の生業ではあるが、両親を含めた一族の者達はそれを誇りに思っていたし、ザンク自身もまた、そうだった。

だからこそ、彼は幼い頃から処刑場や収容所に入りし、人体の構造や如何に罪人を苦しませずに殺すための剣技を学び、当然のように跡を継いだ。

ザンクはその甲斐あつて、成人する頃には既に一端の処刑人になり、時には貴族のような貴人の公開処刑をも行える程の才能を開花させていった。

……だが、彼にとつての不幸は、その才を当時大臣になつたばかりのオネストに目をつけられてしまった事。

オネストは先の皇帝が病床に伏したのを期にその本性を見せ、彼を糾弾したり、政策を異にする文官や武官、賄賂や便宜を断り、庇護下に入る事を拒んだ商人、彼の機嫌を損ねた使用人や平民等々を次々と排除し始め、その罪の連座は親類・縁者にまで及んだ。更に、オネストの腰巾着となつた者達もそれに倣うようになり、帝都における『犯罪者』の数は雪だるま式に増えていった。

既存の収容所では収まり切らないし、かと言って悠長に裁判をしている時間もカネも勿体無い。

ならばどうするか——その対策として、最も残酷で、ある意味最も効率の良いものであった。

——それからザンク達処刑人に命じられたのは、集められた罪人達を、裁判も、尋問も、それどころか罪の有無すら確認する事無く即座に首を切れ、という信じ難いもの。その中の大部分は、無実の罪の人々だと言うにも関わらず、である。

確かに罪人に対して最後に手を下すのは自分たちだ。

しかし、だからこそ処刑人は例えどのような極悪人達であっても、最後まで敬意を払って手にした刃を振り下ろすのだ。

その命令は、この帝国に生きる全ての処刑人の誇りと名誉を足蹴にするにも等しい暴挙であった。

しかし、ザンクを始めとした処刑人達はそれに従わざるを得なかった——仮にオネストの命令に逆らってしまったのなら、次に獄に繋がれ、首を切られるのは自分たちの番……いや、それだけに留まらず、家族、友人、恋人といった自分達の関係者達もその後が続く事になるからだ。

だから、ザンクは切った——己の無実を、助命の嘆願を、憎悪と憤怒の叫びを上げる人々の首を、来る日も、来る日も、何人も、何十人も、毎日、毎日——。

周囲の処刑人達が音を上げ、心を狂わせても、ザンクは首を切り続け……そして、大臣の命令に逆らったとして、親兄弟を含めた一族の者達の首をも切った時、彼はもう、誰かの首を切らなければ生きていけない程に歪んでしまっていた。

——ただ座しているだけの罪人だけでは足りない。

——毎日決められた人間を機械的に斬首するのでは無く、街に赴き、自分の意思で獲物を選んでみたい。

そんな湧き上がる衝動を抑えながらも、自らの責任しことから逃げずに踏み止まっていたのは、ザンクの心の片隅に辛うじて残っていた、処刑人としての挟持だったのかもしれない。

だが、それも日に日に限界に近づいて行き、とうとうそれが爆発しそうになった時……ザンクはラヴィイに出会ったのだ。

刑場を視察に来ていたというエスデスの共として随伴していた彼女は、自分の心を救ったばかりか、己にあの地獄から救い上げる為の道まで示してくれた。

エスデス軍は良い——必要な仕事をこなしてさえすれば、通常ならば満たす事など出来なような己の『人の首を切りたい』という衝動を存分に満たしてくれる。

それに何より、ラヴィイや三獣士、エスデス達との交流は、ザンクにまだ自分が外道に落ちる前の人の暖かさを思い出させてくれる——スペクテッドで覗いたとしても、決して壊れる事の無いものがそこにあるのだ。

歪みきった自分に、真つ当に歪んだ生き方をありがとう——普段は決して口には出さないが、ザンクは心からラヴィイに感謝していた。

(……まあ、本人は俺を救ったなんて自覚なんぞ無いのかもしれないがねえ)

クツクツクツ、と愉快そうに口を歪めながら背を丸め……再び体を起こした時には、ザンクの表情は無機質で、冷静な『仕事用』の顔へと変貌していた——戯れはここまでだ。

——先程までのグツグツと湧き上がるような衝動が嘘であるかのように凧いだ心で、辺りを見回す。

スペクテッドの持つ5つの『視る』能力の一つである『遠視』の力を使い、鐘楼の上から見える限りの、ターゲットの屋敷の様子を伺えるポイントを一つ一つ確認していく。

そしてとある古びた屋敷の屋根の上——そこにスペクテッドの視線を合わせた所で、ザンクの動きがピタ、と止まる。

「——んん？」

使用者であつた貴族が取り潰されたのか、蔦に覆われ、荒れ果てた様子のバルコニーの柱の影——ただ蔦の葉が風に揺れるだけのように見えるその場所に、ザンクは何か違和感を覚える。

——スペクテッドの視線はただ『視る』だけのものでは無い。

例え肉眼では到底見えないような豆粒の如き事象を捉えるだけでなく、その質感や存在感……それが武器ならば金属の輝きや冷たさ、それが人ならばその息遣いや発する熱

や気配のような物であつても、目の前で見ているかのように感じ取る事が出来る。

間違いない、確実に何かがある——そう判断したザンクは、『遠視』を発動しつつ、同時に『透視』の力を行使した。

「……………流石にこの距離じゃキツイねえ…………」

まるで脳自体を締め上げるかのような鈍痛が走り、ザンクは思わず顔を顰める。

並の所有者ならば、精神力を使い切るか、脳神経が焼き切れて廃人になるであろう行為だが、彼は類稀なる同調率と、絶え間ない研鑽によつて、この超絶とも言える能力の行使を可能としていた。

果たしてまるでガラスであるかのように柱が透けて行き——その影に、ザンクでも見事と賞賛したくなるほどに巧みに姿を隠した2つの人影が映しだされる。

体格と立ち振舞いから察するに、どちらも女性。

丁度両者が重なっているため、内1人の顔は何い知れないが、手前側の柱に背を預けるように立つ少女の顔に、ザンクは見覚えがあつた。

「ほおう……………これはこれは……………まさかの大当たりだねえ、愉快愉快」

思わず口の端が吊り上がり、笑みが漏れる。

足まで届く長さでありながら癖一つない黒髪に包まれた顔は伶俐な美貌を携え、首元

に赤いスカーフをあしらったノースリーブのシャツと太腿の半ば程のスカートから伸びる肢体は、スラリと長く、艶めかしい程の瑞々しさを放っている。

それだけ見れば、世の男性が放っては置けない美少女——しかし誰が知ろう。

彼女こそ帝国の暗殺者養成機関における最高傑作にして、巷を騒がせる義賊『ナイトレイド』における『百人斬り』のプラートと並ぶ最強の『切り札』だという事を。

名をアカメ——その刃で一度傷を受ければ、問答無用で死に至ると言われる刀の帝具『一斬必殺』村雨を所持する、剣士である。

現在帝国におけるお尋ね者の中でもトップランクの危険度と賞金を誇る、隠密機動部隊の中でも最重要人物としてマークされている人物だ。

あれだけあからさまに、無辜の民を餌に後ろ暗い事をやっている大貴族……不特定多数の人間から様々な恨みを買っているだろう事から、ナイトレイドの出現を予想していなかった訳では無かった。

しかし、それはあくまで万に一つというレベルの偶然が重ならなければ起こりようが

無い程に都合が良い事態であるため、プランの中には到底入れられないレベルの話……の筈だった。

（——まさか、隊長サマは幸運も呼ぶって事かねえ……？ いや、この場合は不運か）
ザンク達隠密機動部隊の面々は、隊長であるラヴィの潜入を受けて、ここまで万全とも言える体勢を取って対応している。

この場にいる彼を含めて、この屋敷を監視・潜伏している隊員は十数名——いずれもエスデス軍の中では精鋭とも言える実力を持った者達であり、ザンクの号令一つで一気に入入させる事も可能だ。

屋敷の中にいる護衛の兵士の正確な数は分からないが、何度か見かけた者の立ち振舞いを見れば、例えこちらの2倍、3倍の規模であつても容易く殲滅出来るだろう事は明白だった。

しかし、そこにナイトレイドという第三勢力が加わったのならば話は別だ。

ナイトレイドの最大の特徴としては、判明しているメンバーの全てが帝具を所持している事。

帝具は帝具でしか対抗出来ない——これらを前にしては、どのような万夫不当の兵も

ただの赤子と化す。

帝国最高の拳法寺・皇拳寺のマスタークラスや、かつて隆盛を誇った暗殺結社『オーベルベルグ』の精鋭等の極々一部の実力者ならば話は別だが……そんな人間など、指折り数えた方が早いレベルの人数しかない。

そもそも帝具を抜きにしても、基本スペックが違う——アカメは言うまでも無いが、傍らにいる女性も相当な実力を備えている事は明白だ。

——そして、そのザンクの予想を肯定するような事態が起きる。

スペクテッドに映る2人の顔が、射抜くかのような眼光と共に、弾けるかの如くこちらを向いたのだ。

「……っ!!」

咄嗟にスペクテッドの能力をカットし、素早く身を隠す。

全ては一瞬——しかし、ザンクは荒くなる呼吸と背中を濡らす冷たい汗を抑える事に必死になっていた。

「いやあ……失敗失敗。気は抜くもんじゃあないねえ……」

気付かれた……訳では無いだろう。

恐らく彼女達は、スペクテッド越しのザンクの視線を殺気として感じ取り、それに反射的に反応しただけだ。

それだけだというのに、己の心胆を凍えさせるようなあの視線——彼は頭のなかで練っていたプランを大幅に修正する。

そして同時に、先程まで抑えていた衝動がムクムクと湧き上がって来るのを感じていた。

「ククク、こいつは決まりだねえ……愉快愉快」

ザンクは再び口の端を禍々しく吊り上げると、鐘楼の下で待機していた部下達に次なる命令を下した。

「……気付いたか？」

その同時刻——アカメは共に今回のターゲットが住む屋敷の監視をしていた金髪の女性に向かって、目配せして語りかけていた。

「ああ……間違い無え、『何か』が私らを見てやがった」

女性は、アカメの言葉に頷くと同時に辺りに素早く視線を巡らせる。

そして、鼻をすんすんと鳴らし……驚くべき事に、頭頂部に生える獣の耳をひくつかせる。

「辺りにそれっぽい影も、臭いも、音も無し……つと。流石に私らに気付くような奴じゃ、そう簡単にシツポ掴ませちゃくれねーか」

悔しげにボリボリと頭を搔く腕の肘から先は金色に輝く美しい毛並みに覆われ、指先からは鋼鉄をも切り裂けそうな程に堅く鋭い、それでいて生物的な光りを放つ爪。

背中の半ばまで伸びる癬毛はまるで鬣のようにうなじを守り、必要最低限の布地に守られた豊満な肉体は、見る者に性的な欲求よりも、野生的な美しさを覚えさせる。

彼女もまた、アカメと同じくナイトレイドの一員であり、その中でも類稀なる身体能力と肉弾戦闘能力を持つ組織のムードメーカー。

名をレオーネ——所持する帝具は腰のベルト、人の身に獅子の如き力と鋭い五感を与える『百獣王化』ライオネルだ。

「だーっ!! クソツ!! 出歯亀野郎め……会ったら絶対金取ってぶん殴ってやる!!」

私の体は安くねーんだぞー!! と冗談なのか、本気なのか定かでは無い文句を垂れるレオーネに内心苦笑しながらも、アカメは先程まで感じていた視線について頭を巡らせていた。

(レオーネの言う通り、周囲にそれらしき人影も音も気配も無い……しかし、確かに感じた)

明らかに近くから見られているかのような強い視線を、しかも柱越しにだ。

こちらに容易に探知出来ないような位置から、障害物を越えてこちらを監視する正体不明の敵……厄介なのは間違い無い。

「——レオーネ、ふざけるのはその辺にして、別の場所へ移動しよう。さつきの視線を考えば、ここは既に割れていると考えた方が自然だ」

「あいよつ、退散退散つと」

そう告げながら屋敷の屋根へと飛び上がると、レオーネは先程までの怒りが嘘のように冷静な顔で頷き、その後続く。

2人は貴族の屋敷の屋根から屋根へ、音も気配も無く移動していく——それだけでも、この2人の技量の高さが伺えた。

「……まずはラバックの所に行こう。他の皆に伝えて貰わないとな」

「そーだな、今回の任務……ちよーつとヤバイ臭いがするぜ」

他の仲間たちへの連絡役の潜伏先へと向かいながら、ただ人数が多いだけの外道どもを殲滅するだけだった筈の今回の任務に、2人は言いようも無い『何か』を感じていた。

「気を引き締めよう——今回の任務、恐らく只では終わらない」

——そんなアカメの言葉通り、その夜事態は大きく動いた。

「……………き……………て……………さ……………」

とんとん、と肩を叩かれて、アタシは目が覚めたツス。

いけないいけない……………程よく紅茶の隠し味が効いて、ウトウトしてたみたいツスね。
うゝん……………まだまだ死んだ婆ちゃんみたいには行かないツスねえ。

「……………起きて下さい、お客様」

「ん……………今起きるツスよ……………」

少し間延びした声で、使用人さんらしき人の呼びかけに答えながら、起き抜け特有の

気怠さを打ち払うように背伸びを……しようとして、失敗しました。

何故なら今、アタシの体は手足を雁字搦めに縛られ、冷たい石の床に転がされていたからツス。

可能な限り首と目を動かして辺りを見回せば、周囲には10数人程のメイド服や家令服を身に纏った使用人らしき人達。

皆が皆、屋敷で給仕をしていた時のようにこやかな笑みを浮かべていたツス。

まるで、お伽噺とか演劇の一幕みたいな、お姫様の目覚め——縛られた上に床に転がされてるこの状況と、彼らの手に握られてるモンに目を瞑ればツスけどね……。

使用人さん達の手には、大小様々な得物が握られていたツス——それも、猫の尾と呼ばれる棘付きの鞭に、歯を抜くためのヤットコ、手足を叩き斬る為の牛刀や、果てには『苦惱の梨』なんかを弄んでる奴までいるツスね。

言うまでも無く、それらは拷問……それも本来の目的では無く、被害者の苦痛や悲鳴を楽しむ、最後には殺してしまう事を目的とした歪んだモノツス。

更に、周囲にはスパイクの生えたイスや鉄の処女、あ……水責めに使う水車とかもあるツスねえ……。

しかも壁や天井のあちこちには、程よく解体された先客が吊るされていたりするんで、はつきり言つて血臭や腐臭が凄くて、まるで地獄のような光景がそこにはありました。

「お早うございます……良い夢は見られましたか？」

お辞儀するその姿は、流石は大貴族サマお抱えの召使い……でも、こんな所でそんな立ち振る舞いされたら、はつきり言つて狂気以外の何物も感じないツスよ。

「………少なくとも、目覚めは最悪ツスね」

「それは残念です。お客様の最後の安眠が、安らかであれば良かったのですが」
縛られたアタシを見下ろしながらも、尚もコロコロと笑う使用人さん。

周囲にいた人達も、それに併せてクスクスと笑みを零したツス。

「……で、何でこんな事になつてるんスか？ んで、ここは何処ツスか？」

「あらあら……こんな状況になつても、呑気なものねえお嬢ちゃん？」

アタシの言葉に、先程までの恭しい雰囲気ガラリ、と変えて、嫌らしいニヤニヤとした笑みを浮かべた使用人さん——いや、もうこんな奴らに敬称付ける必要なんか無いツスね——使用人の女は、こちらに見せびらかすようにコルク抜きのように捻じ曲がったナイフをひらひらとさせます。

「チツ、何だよ……目覚めてすぐに喚き散らして震えた方がこつちも楽しいのによお」

「まあまあ、きつとまだ寝惚けて現実味が湧かないんでしょ？　そもそも鈍臭そうなチビだしね」

周囲の奴らも、何だか好き勝手言ってるツスが、そんなのを無視して言葉を続けるアタシ。

「——ウザったいんで、無駄話してないでとつとと答えて貰いたいんすけど？」

「……ンの餓鬼、調子に乗るんじゃ——」

「落ち着きなよ、今から痛めつけちゃ長く保つてくれないじゃない——それに、あの世への土産として答えてあげないとね」

無力な筈のアタシの言葉が生意気に感じたのか、使用人の男がアタシを蹴り上げようと脚を振りかぶるのを、まあ何ともお決まりのセリフを吐きながら女が止めたツス。

「それじゃあ、答えてあげるけど……ここは屋敷の中にある倉庫の一つを改造した、ご主人様方特性の拷問部屋よ。」

そして貴方は、数ある『お客様』の中から、ご主人様方の『趣味』に特別に参加する事を許されたという訳

「私としては、あつちの茶髪の男の方が良かったんだけどなあー」

「無茶言うなよ、あつちはアリアお嬢様のお気に入りで。俺たちが手を出したら殺されちまうよ」

「あら、でもちよつとはつまみ食いもいんじやない？ 手足はともかく、目玉の一個くらい大人しくさせるため仕方なく……つてね」

「チツ、たまにはお零れじゃなくて1から10までやらせて欲しいもんだぜ」

楽しんで、まるで茶飲み話のおよ様な調子で啜うその姿は、正しく悪鬼……大臣なんかと比べたら小さすぎる位ツスけど、そこには確かに外道の群れがいたツス。

「まあ、そんな訳だから諦めてオモチャになって頂戴？ 最期に、あんた達みたいな田舎者には不相応過ぎる場所で過ごせたのだから、思い残す事も無いでしょう？」

まるで捕まえられた昆虫が、虫かごの中で動くのを外から眺めるような優越感に浸つた目をしながら、女はアタシに向かって自分勝手な理屈を並べたてます。

それをアタシは冷めた目で見つめながら、最後の質問を投げかけたツス。

「——こんな事をして、アンタ達は何とも思わないンスか？ そもそも、何でそのご主人様の趣味とやらに、アンタらまで参加するようになったンスか？」

アタシの言葉に、使用人達は一瞬互いに顔を見合わせると、爆発したかのようにゲラゲラと笑い始めたツス。

「アハハハハッ!! そりや思ってるわよ……世間知らずのお上りさんを痛めつける事が出来て、楽しくて楽しくてしようがないとかねえ!!」

「勿論最初は驚いたし、恐ろしかったぜえ? 手伝いを嫌がったらここにいる奴らと同じように殺されたし、機嫌を損ねたら放り出されるかもしれないなかつたからな」

「……でも、その内ご主人様方も私たちを信頼して色々と任せてくれるようになったら、段々と楽しくなつて来てさあ」

「ああ、圧倒的な強者にしか許されない高尚な趣味だよこれは……俺達は選ばれたんだ!!」

「それにアンタ達田舎者のせいだ、帝都の治安は乱れる一方——ただでさえ困ってるのに、余計な手間かけさせるなつてのよ」

「そうそう、これは間引きだよ。俺達は無能な役人たちの手助けをやってやってるんだよ。感謝して欲しいもんだぜ全く」

——それを聞いて、アタシは深く溜息を吐いたツス。

嗚呼駄目だこいつ等——救い様が無い、と。

彼らの言い分通りならば、最初こそサデイストな主人の後始末を嫌々任されていたんでしよう。

でも本当に嫌ならば、そこで逃げ出したり、何とか外にこの事を伝えたり、何かしらの事は出来た筈ツス。

けど、彼らはそれをしなかった。

怖いから、死にたくないから、仕方無い、これは正しい事なんだ……そんな言い訳を続けながら、いつしか何の理念も覚悟も無く、弱者を痛めつける事に酔いしれた愚物——エスデス様だったら、そう評するでしょうね。

……さて、そうと分かれば長居は無用ツスね。

「よいしょつ……と」

「おいおいお嬢ちゃん、何やってんだ？ 雁字搦めに縛り上げた上に、痺れ薬入りの紅茶をたつぷりと飲ませたんだ。」

抵抗するだけ無——」

アタシがもぞもぞと体を動かしていると、それに気づいた使用人の一人が嘲笑を浮かべたツス。

けどそんな彼をあざ笑うかのように、はらり、と解ける縄と、立ち上がるアタシ。

「ふーっ、ヘツタクソな縛り方ツスねえ。おかげで体が痛いツスよ」

「……………は？」

体を解すようにコキコキと首を鳴らし、今度こそ伸びをするアタシに、使用人が呆けたように口を半開きにして固まりました。

「な、何で!? あんなに頑丈に縛ったのに!？」

「んー？ さつき言った通り、縛り方ヘタクソ過ぎツスよ。あんなんで訓練された人間を拘束しようなんて片腹痛いツス」

「訓練された……!?! な、なら痺れ薬は!？」

「あー、そつちは体質ツス。昔取った杵柄とやらで、毒とかそつち系の奴は効きにくいん

スよねー」

まあ、詳しい経緯は記憶がチーズ状態なんでロクに覚えて無いんですけど、そこまで教える義理は無いツスからね。

何となく、死んだ婆ちゃんに仕込まれたような覚えはあるツスが……だとしたら婆ちゃん何者なんだろう？ 謎は深まるばかりツスが、そんな事気にしてる時間も無いよ
うツスね。

アタシが拘束から逃れた自失から立ち直った使用人たちが、一斉に詰め寄って来たツス。

「け、けどこの人数に囲まれたら逃げられないでしょ!？」

手にした得物を振り上げて迫る彼らに、アタシは深い溜息で答えます。

「……あのツスねえ………舐めるのもいい加減にするツスよコンの層共」

瞬間、手近な所にいた使用人の一人の顔面が陥没し、血飛沫と砕かれた歯が宙を舞ったツス——勿論、やったのはこのアタシ。

周りに粗末な毛皮を巻いて偽装していた白兔の脚甲で、能力を使わずに蹴りつけただけツス。

一応殺さないように手加減はしたツスけど、まあ一生ベッドから起き上がれない程度には痛めつけさせて貰ったツスよ。

「……………、このっ!!」

顔面を文字通り崩壊させた同僚の惨状から立ち直った女が、猫の尾を振り上げたツスが、三獣士の皆やエスデス様に鍛えられたアタシにとっては、止まって見えるぐらいに遅いツス。

振り上げた腕に蹴りを叩きこんでへし折り、そのまま返す刀で両膝に足裏を叩きこみます。

そこまで戦闘能力の無いアタシでも、弱者痛めつけて調子に乗ってる一般人をノす位なら朝飯前ツス。

「あ、が、ぎやあああああっ!!」

両膝を曲がってはいけない方向に捻じ曲げながら、悲鳴を上げて倒れる女を尻目に、アタシは白兔の能力を使って天井へと飛び上がり、そのまま勢い良く壁に向かって突進したツス。

「うりやあああああああっ!!」

轟音を立てて壁に穴が開き——その向こうからは、月夜に照らされた庭園の光景が広がっていたツス。

「どうやら、庭の外れの辺りだったようツスね。この後の行動がやり易くなりそうツス。」

「あ、ありえねえ……て、てめえは、い、一体何者なんだ!？」

壁抜けなんていう所業を成し遂げたアタシを見上げて、使用人が怯えたように叫びます。

まあそりゃこんな小娘が帝具持ちなんて想像してない奴らにとつちや、アタシはさぞ化け物に見えるでしょうね。

しかし、説明する暇も義理も無いんで、それを無視してアタシは彼らを見下ろしながら一方的に通告したツス。

「さて、アンタら覚悟は出来てるツスよね？　今まで好き勝手やって来たんスから、それなりの報いは受けて貰うツスよ？」

……楽しい時間は、これで終わりツス」

「は……はっ!!　衛兵にでも訴えるつもりか!?!　あいつら如き、ご主人様達の権力で——」

「分かって無いツスねえ……もう、終わりツス……終わりなんスよ」

尚も強がつてみせる彼らに若干憐みを覚えながら、アタシは一枚の羊皮紙を投げつけたツス。

そこには、貴族に係する者ならば誰もが知っているこの国の重臣——ブドー大將軍の紋が焼き付けられています。

「これがアタシの後ろ盾ツス。如何に大貴族でも、大將軍が本腰入れたら、逃れられる訳が無い」

「ひ……………あ……………」

「さあ、今度こそ覚悟は決まったツスか？」

今度こそ絶句する使用人達——ブドー大將軍が本気になった時点で、そしてアタシ達隠密機動部隊がこの任務に従事した時点で、アンタらは狩る側から狩られる側になったんす。

——そしてアタシは、エスデス軍の『首切り兎』。

「——兎の牙が、その首刈りに来たツスよ」

その名にかけて、狙った獲物は逃さない——!!

そして、兎は出会った

拷問部屋の壁を崩して一先ずの退路を確保したアタシは、すぐさま再び壁を蹴り、ガタガタと震える使用人達目掛けて飛び降りました。

「ひっ!？」

「ま、待てっ!! 待ってくれっ!! 命だけ……命だけはっ!!」

「わ、私達はお、脅されてただけなのっ!! 本当はこんな事したかった訳じゃなくて——
!!」

先程までの威勢は何処へやら、怯えきり、見苦しくも言い訳や命乞いを繰り返す使用人たち。

……こういうのを見ると、エスデス様が『豚』と弱者を見下すのも頷けるツス。

さつきアタシに対して言っていた言葉を思い出してみろって言いたくなるツスよ——
きつと自分達が逆に狩られる側になるなんて、夢にも思ってたんでしょ
ねえ。

「——安心して下さいッス。殺しはしないッスよ」

「ほ、本当か!? な、なら——」

深い溜息を吐きながらのアタシの言葉に、使用人の一人が引きつった笑みを浮かべながら歩み寄つて来たッス。

アタシはソイツにニッコリと笑いかけます。

「所でオツサン……さつき縛られてたアタシを蹴ろうとしてくれたッスよね?」

「へ……?」

「未遂とはいえ、一発は一発ッス——ぶっ飛ぶッスよ」

そう告げると同時に、アタシは使用人の顎目掛けて上段回し蹴りをぶちかましたッス。

湿つたような鈍い音と共に、使用人は勢い良く吹っ飛び、吊るされていた拷問器具を巻き込みながら壁に着弾

したッス。

「あ、あ……が……」

砕けてだらしなく垂れ下がる顎からうめき声を上げる彼の体には、大小様々な拷問器具が突き刺さり、全身血達磨状態だったッス。

ふー、スッキリ気分爽快ッスね。

「ひ、ひいいいいっ!？」

それを見ていた他の奴らは、その光景を見てようやく現実を受け止めたのか、悲鳴を上げながらある者は入り口目掛けて、ある者は部屋の隅へと逃げようとします。

だーかーらー、もう無駄だって何度も言ってるし、そもそも逃がすつもりも無いツスよ。

それに、ここで外に出しちゃったら、ブドー大將軍やザンクさん達に面倒かけさせちゃうツスからね。

アタシは容赦無く、彼ら一人一人を念入りに程よく傷めつけるべく、行動を開始しました。

——その後起こったのは、戦闘とも言えないような一方的な蹂躪劇だったツス。

階段を上がろうとした奴らの足を払うか、蹴り飛ばして下まで叩き落とし、隅っこに逃げようとした奴らはそのまま追い詰めて、蹴り一発で傷めつけてから、手足を踏み砕いて終了。

数分後——使用人達は、全員が全員、今まで彼らが傷めつけてきた弱者のように床に這いつくばっていたツス。

中には白目になったり、口からあぶくを吐いて気絶してる奴もいるツスけど、命には別状無いんで問題は無いツス。

——普段の戦闘もこう上手くいけば良いんすけどね……これはあくまで相手が全て素人の一般人だったからツス。

白兎最大の武器である機動力が極端に制限されるこの屋内——仮に訓練された兵士が相手だったら、足を止めた瞬間に反撃されて、下手すりゃ袋叩きだったツスね。

浮かれそうになる思考に自ら冷水をぶっかけて落ち着かせつつ、アタシはこの後自分がやるべき事を整理します。

取り敢えず今この場でやれる事は全て終了——後はアタシの合流を待つてここに侵

入してくる手筈になつてゐる部下の人達に命じて、本隊であるブドー大將軍直屬の衛兵隊の皆さんに引き渡すだけツスね。

「やつ、と……」

ようやく一息……とは行かず、アタシは今まで使用人達への対応で目が向けられなかつた『先客』達の惨状に目を向けました。

天井から吊るされ、足元から肉を削ぎ落とされ、苦悶と絶望の表情で事切れた男性。四肢のあちこちと、舌に釘を打たれ、ピクリ、ピクリと痙攣する女性。

恐らくは最期の寸前まで、互いの伴侶へと落とされそうになるギロチンの刃へと繋がる繩に必死で噛み付いていたであろう、粉々になつた齒から血を流し、未だ目元を涙で濡らす老夫婦の生首。

何かしらの毒を盛られたのか、全身を紫色に腫れ上がらせながら、濁つた目つきで獣のように唸る事しか出来ない青年。

——皆が皆、死ぬか、最早手遅れか、再起不能に陥ってしまった人達ばかりだったッス。

まだ生きている人達……でも、絶望的なまでに手遅れとひと目で分かる人達が、助けを求めるように見つめ、アタシに向かって手を伸ばします。

それを見ながら、アタシは目を逸しながらきつく齒を食いしばる事しか出来なかつたツス。

エスデス様ならば、彼らを見たならば一言、『こいつらは弱かったからこうなつた』とバツサリと切り捨てるんでしようが、未だにその弱者の浅瀬に立つアタシとしては、そう簡単に割り切る事は出来なかつたツス。

もしもアタシがエスデス様に出会っていなくなつたら、白兔という帝具を与えられていなくなつたら……きつとアタシは、この拷問部屋の中の一員になつていたかもしれないなかつたツスからね。

……でも、今アタシはこの拷問部屋から抜け出す力を持っていて、彼らは持つていなかった。

これが全て——だから、アンタらをここに置いていくアタシを恨まないで欲しいツス。

ひたすらに目を逸し、耳に入るか細く壊れた蓄音機のように助けを求め、声を鼓膜から追いやつて、再びアタシは床を蹴つて壁の穴から抜けだそうとして――

「なあ……アンタ……」

はつきりとした意思を持つて呼びかけられた声に、思わず足を止めてしまつていたツス。

目を向けると、壁際に設けられた檻の鉄格子により掛かるように、上半身裸のバンダナを巻いた小柄な少年がいました。

元々はかなり鍛えていたと思われる引き締まつた体には、まるで侵食するかのよう、禍々しい黒い痣が出来ていたツス。

あれは恐らく、南方特有の致死性の伝染病であるルボラ病の末期症状……これまた、確実に手遅れつスね。

「何スか？ 悪いツスけど、助けるつもりは――」

敢えて冷たい言葉を選んで振り切ろうとした瞬間、それを遮るかのよう、少年は満面の笑みを浮かべながらアタシに向かってお礼を言つて来たツス。

「あ、ありがとよ……アイツらをぶちのめしてくれて……スカッとしたぜ、へへ……」

——動く度に激痛が走り、腐っていく肺のせいで呼吸も満足にしてくれない筈の体を引き摺り、腐った血でドロドロになった菌莖を剥き出しにしながらも満面の笑みで。

死に際にあつてもその有り様は、誰が何と言おうと『強い』と思わされます。

その気丈な振る舞いと、頭に巻いたバンダナを見て、ふと昼間に会話を交わしたタツミくんがしてくれた話の中にあつた名前が自然と口から零れていたツス。

「もしかして……イエヤスくん……ツスカ？」

「……っ!? お、俺を知ってるのか!？」

どうやら大当たりだったみたいツス。アタシは僅かに顔を顰めました。

こりや失敗したツスね……:会話を成立させてしまった以上、そのまま見捨てていっちゃったら、目覚めが悪いにも程があるツスから……:ううー、こういうのをバツサリと出来ないのがアタシの悪い癖ツス。

「ええ、今朝方知り合つたタツミくんつて人に話を——」

「タツ……っ!? 本当か!? タツミがここに!? ま、まさかアイツもこの場所に……!？」

その名前を聞いた瞬間、イエヤスくんは何処にそんな力が残っていたのか、けたたましい音を立てて鉄格子を思い切り揺らしました。

消えようとしている自分の命よりも、親友の事を心配するその姿に、幼馴染にしてライバルだという彼らの絆の深さを嫌でも実感させられたツス。

「お、落ち着いて下さいツス!! 少なくともここに連れてこられたのはアタシが最後までたいツスから、まだ無事な筈ツス!!」

「そ、そうか……よ、良かった……!!」

アタシが居眠りしている間に、何かを盛られてるって可能性も否定出来ないツスけど……。

恐らく瀕死の彼を支えているのはきつとタツミくんでしょうから、わざわざその支柱を折りかねない事実を伏せて答えると、イエヤスくんは心底ホツとしたように息を吐いたツス。

——けど、そこで気を緩めてしまったのがいけなかったのか、彼はそのまま盛大に咳き込み、噴水のように血反吐を床にぶち撒けました。

「ゲッ……ゴボツ……は、はは……」

その血の量に、イエヤスくんは何かを悟ったのか、ゼエゼエと苦しそうに呼吸をしなからも穏やかな表情で問いかけて来たツス。

「な、なあ……アンタ……オレ……もう、助からな、い……のか？」
「……………ええ」

覚悟を決めた人に嘘を吐ける程神経が図太くは無いつス——アタシは、素直に頷きました。

それに、イエヤスくんは寂しそうにふ、と微笑んだツス。

「……………そつか。なあ、頼みが、あるんだ」

彼は震える手で鉄格子の間から、天井の一面を指差します。

——そこには、手枷で拘束されたまま天井から吊るされた裸の少女がいたツス。

全身を惨たらしい傷から流れでた血で真っ赤に染めて、片足を腿から切断されてるツスね……ひと目見ただけで、既に事切れているのが分かったツス。

でも、拷問され尽くした割には不思議と穏やかな表情を浮かべていて、長い黒髪は血糊に負ける事無く、アタシのモノとはまるで違う、癖一つ無い美しさを保っています。

……………恐らく彼女が、タツミくんの話に出てきた、もう一人の幼馴染……サヨさんなんでしょう。

「あ、アイツを……サヨを……下ろして、やってくれ……」

「……分かったッス」

もうここまで来たら毒食らわば何とやらッス——アタシはイエヤスクんの望み通り、サヨさんの亡骸の拘束を解き、アタシが身に着けていたボロ布を敷いて床に寝かせてあげたッス。

「ちよつと離れてるッスよ」

そして、ついだとばかりに、イエヤスクんの檻に向き直ると、扉の錠を白兎の蹴りでこじ開けて、彼に肩を貸して檻の中から出してあげます。

「……………ありが、とよ」

「良いッスよ。……この人達を見捨てていく、せめてもの罪滅ぼしッス」

もう殆ど力の残っていないイエヤスクンをサヨさんの隣に横たえようと、彼は氣力を振り絞るように彼女の頬を愛しそうに撫でたッス。

動きを見るに、最早氣力だけで動いているような状態みたいッスね……。

「へ、へへ……コイツは……サヨは……最期まで、あいつらに屈しなかつたんだ……カッ
コ、良かったんだ、ぜ……？」

「ええ、そうッスね……立派だと思っス」

断末魔のような独白に答えるアタシの言葉は、本心からのものでした。

もし自分がサヨさんのような状態に陥ったら、きつとアタシは見苦しく泣き叫び、命

乞いをするに違い無いツス。

そんな責め苦を全身に受けながら、こんな穏やかな表情のまま事切れるなんて、並の人間なら絶対に出来ないでしょう。

「だ、だから……このイエヤス様も……最期くらいは、カツコ……よ、く……」

そう言つて満面の笑みを浮かべたまま、イエヤスくんは二度と動く事は無かつたツス。

それを見届けると、アタシは濡らした布を使つて、2人の顔の血を拭きました——死化粧には不足ツスが、これくらいは良いツスよね？

「——うん、カツコ良かったツスよ間違ひなく。きつと、エスデス様も認めるくらいには」

そんな称賛を投げかけながら、アタシは立ち上がったツス。

——アタシは今、この屋敷に住んでいる奴らに対する殺意を抑える事に必死でした。

きつと彼らは生きてさえいれば、優秀な兵士になつたでしょう——それこそ、エスデス軍にも入れる位に。

もしかしたら、アタシの同僚になつたかもしれないツス。

そんな少年の、少女の未来を自分達の欲望を満たすただけに、何の覚悟も信念も無く閉ざした外道共……この白兎で蹴り殺したら、どんなにスツとするツスカね……。

……けれど、今のアタシに与えられた任務は、この屋敷の人間を殺し尽くす事じゃ無く、あくまでソイツらの所業を告発するための証拠を集める事ツス。

アタシはそう自らに言い聞かせ、自分の中のドス黒い感情を吐き出すかのように深く、深く深呼吸をして、荒ぶりそうになる感情を抑えたツス。

あくまでアタシは帝国兵という名の一つの歯車——でも、これくらいの我侭は許されるツスよね。

「……せめて、仇は取るツスよ」

誓いを立てるように、もう一度イエヤスくんに向き直りながら告げると、アタシは今度こそ床を蹴り、壁の穴から次なる証拠固めを行うために駆け出し——、

——まるで背中に氷の固まりを入れられたかのような悪寒に身を震わせたツス。

「……っ!?」

——ヤバい。ヤバいヤバいヤバいヤバいっ!?

——アタシの勘が、全身全霊の力で危険信号を発してるツス!!

その感覚を敢えて表現するならば、エスデス様や三獣士の皆、ザンクさん達から、全力の殺気を当てられたかのような凄まじさ。

こんな場所に、こんな夜更けに、こんな殺気を放てる奴なんて……。

いや、一つだけ心当たりがあったツス。

夜の闇からやって来て、世に蔓延る外道共を葬る最強の殺し屋集団——。

「ナイトレイド……!!」

予想してなかった訳じゃ無いツスが、今の帝都において、アタシの勘にここまで危険信号を発せられる存在は、彼ら位しか存在しないツス。

その予想を裏付けるかのように、中庭の方角から悲鳴と何か硬い物がぶつかり合うような湿った音、そして少し遅れて銃声が響き渡ったツス。

——急いで白兎の能力で宙を舞い、身を隠しながら中庭を伺うと……そこに、いたツス。

距離があるので顔までは見えないツスが、紅く染まった月の下、屋敷の塔から塔へと張り巡らされた糸のような足場に立ちながら、眼下の警備兵達を見下ろす数人の男女の姿が。

——西方民族特有のピンクブロンドの長髪を、ツインテールにした巨大な銃を構える少女。

——緑色の短髪をゴーグルで飾った、右手から足場代わりの糸を張り巡らせた青年。

——体のあちこちを獣毛で覆い、獣の耳を生やした肉感的な金髪の美女。

そして中庭には、無骨で巨大な槍を持った、全身を鋼色の鎧で覆った巨漢と、2 m近い長さの長刀を構え、スカーフをあしらったノースリーブのシャツに、プリーツの入った短いスカートをマントで覆った黒髪の少女。

情報が確かならば、恐らく全員が帝具持ち——その上立ち振舞いを見るだけでも、アタシを遥かに超える実力者である事は明白ツス。

中庭にいる2人は特に別格……下手に手を出したり見つかるうものなら、多分白兔の機動力があつたとしても殺される自信があるツスよ。

「さっき誓ったばかりの約束を、いきなり破りたくは無いつスからね……!!」

アタシは彼らに気付かれないように細心の注意を払いながらその場を離れると、予定通りザンクさん達との合流地点を目指して走りだしました。

合流地点である裏口の扉にアタシが到着すると、そこには既に部下の人達を引き連れ、たザンクさんが待ち構えていたツス。

足元には、見張りについていたらしき警備兵が2人、首を綺麗に跳ね飛ばされて死んでます——相変わらず惚れ惚れするような技の冴えツスね。

「よお、隊長……随分と遅いご到着じゃないか？」

「スンマセンね、ちよつと野暮用があつたものツスから」

「……………そうかい、何にせよお疲れ様だねえ。こちらは既に準備完了——いつでも動けるぜ？」

アタシの思考を読んだのか、それともアタシの顔を見て何かを察したのか、ザンクさんはそれ以上からかうのを止めて、集合の報告をしてくれました。

……………正直今は素直にからかわれる程の体力が無いんでありますがたい事ツスね。

「……………所で、人数と構成の変更について質問しても良いツスカザンクさん」

彼の報告を受けて確認すると、部下の人達の人数は当初予定していた人数より大幅に少なく、しかも全員が帝具由来の技術を駆使した機動力を強化するズボン^{ズボン}を装備した、隠密行動に特化した隊員ばかりだったツス。

「隊長も見たように、予想外のお客さん^{ナイトレイド}が来たモンでね……戦闘要員をいくら用意しても、無駄死だと思つてねえ」

「成程、戦闘よりも証拠固めを再優先つて訳ツスカ——了解ツス」

ザンクさんの地位は、隊長がいない間に代理を務める副隊長——編成の変更については権限的にも合理的にも妥当と判断して、ザンクさんに思考を『視て』貰い、編成を変えた上での作戦を伝えます。

「——各人の担当する場所は以上。」

最優先事項は、この屋敷の主とその家族の所持品や書類の押収と、犯行現場である離れにある倉庫の確保。

戦闘はアタシとザンクさん以外の人員が行う事は禁止。ただし使用人の制圧と無力化は許可する。

ナイトレイドと遭遇した場合は、閃光弾にて合図すると同時に任務を放棄しその場から全力で離脱、セーフハウスへと自力で帰還——良いツスね？」

『——了解』

「では、掛かるツス!!」

アタシの号令の下、部下の人達は一齐に素早く屋敷のあちこちに散らばっていったツス。

「さて、それじゃ俺らも行くとするかね、隊長殿？」

「……ええ」

それに続いて、受け取った装備を確認しながらアタシもザンクさんと共に行動を開始したつす。

武装はベルトに差した近接戦用のナイフ2本と、サスペンダーの左右に投擲用ナイフをそれぞれ十本ずつ。

防具は機動力を重視して最低限——体は硬くなめした革の胸当てに、腕には要所要所を鋼で強化した手甲、脚には白兎があるので特に無し。

後は鍵をこじ開けるピッキングツールと、離脱用兼合図用の閃光弾。

一方のザンクさんは、いつもの防刃使用のロングコートの袖口から肉厚の刃を取り付けた手甲——パタの刀身を飛び出させて既に準備完了。

つい今しがた護衛の首を切り落としたにも関わらず、その刃には一つの刃毀れも曇りも存在していないツス。

……ただでさえ難しい斬首という所業を、こんな武器でやってしまうんすから、相変

わらずとんでもない腕してるツスねこの人。

「なあ隊長……いや、ラヴィ」

準備を終え、さあ出発だ、という段階になって、不意にザンクさんが口を開いたツス。
しかも、珍しくアタシの名前を呼んだツスね——彼がアタシの事をこう呼ぶ時は、任務以外の事で、真面目な話をする時だけツス。

「……何スカ？」

「——あまり、夢は見過ぎるなよ？」

いくら一瞬キレイなモノが見えたとしても、俺たちの居るこの場所が、ゴミ溜めである事には変わりはないのさ」

それは忠告と言うには優しすぎ、慰めというには厳しすぎる——そんな声でした。

アタシの人生の半分以上もの間、帝国の闇とも言うべき吹き溜まりで生きてきたザンクさんが溜め込んだモノを吐き出すかのような言葉に、アタシは頷くでも無く、反発するでも無く、苦笑いを浮かべる事しか出来なかつたツス。

「——分かつてるツス。分かつてるツスけど……何とも割り切れないというか、踏ん切りが付かないというか……どうも、アタシは中途半端な所でウロチヨロしてるのが性に合ってるみたいで……」

ポリポリと頭を掻きながら、アタシは纏まらない頭の中の感情を、どうにか言葉にして口を開きます。

「そういう、この国における自分の立ち位置とか、進むべき方向とか……まだハッキリとは決めたく無いんすよ。」

それがもし、戻る事の出来ない、取り返しのつかない『何か』への片道切符だったら………って思うと、どうにも逃げたくなるんす」

まるで曖昧で、頼りない幼い頃の記憶の中で、今でもはつきりと覚えている、どうしようも無い、抗いようも無い理不尽から逃げて、逃げて、逃げて………その先で出会った、エスデス様の笑顔と、冷たいけれど温かい腕。

——アタシの人生は、『逃げる』事から始まったんす。

だからアタシは、この先きつと『逃げる』事を止めないでしょう。後ろが駄目なら横へ、横が駄目なら前へ、全部駄目なら空へと逃げて……。

——きつとその先には、そのまま進んだり、立ち止まった場合よりも良い未来があるって、アタシは信じたいから。

それに、そのための白兔ちからも持っている訳ツスから、折角なら使わなきや損ツス。

「——だから、本当に袋小路に嵌はり込んで動けなくなるまで、『こういう』感情を割り切らないって決めてます。

ザンクさんが止めたって無駄ツスよ？

も、勿論エスデス様に言われたら、一旦は領かないとオシオキされそうツスから場合によるツスけど——」

思わず言ってしまった、まるで子供のような屁理屈にすらなっていないような暴論へのツツコミを恐れて、思わず捲し立てるようにワタワタと言葉を続けていると、ザンクさんはいつものような引き攣くったものでは無く、純粹な笑みで笑ったツス。

「ハハハ……ラヴィ、やつぱりお前は——アンタは強いよ、隊長……多分、エスデス軍にいる他の誰よりもな」

「……それいつもの皮肉ツスカ？」

「さあてねえ……愉快愉快」

誤魔化すかのようにこつちをからかいながら、ザンクさんはグシャグシャとアタシの頭を撫で回しました。

「ちよ……っ!? いだだだだだっ!! 箆手で撫でるの止めるツスよ!! しかも剣出したまんまだし危ないツス!!」

「おつとこりや失敬……さあて、無駄話はこの辺にして、そろそろ行くぞ隊長殿?」

「元はと言えばザンクさんが呼び止めて——」

「さあて、何の事だか——それじゃあ、お先に?」

「待つ……ああもうっ!! 後で覚えとくツスよ!! 『跳兎』はねうさぎっ!!」

言葉を待たずに素早く屋敷のバルコニーへと跳ぶザンクさんへと悪態を吐きながら、アタシは彼に続いて白兎で宙を舞い、担当する区域へと急ぐのでした。

人知れずラヴィ率いる帝国兵達が行動を開始したその時から遡ること数分前——ナイトレイド達の任務は佳境に入っていた。

——今回の任務は、帝都に上京してきた地方の民を善意を装って屋敷に招き入れ、拷問や投薬等を行って死ぬまで攻め続けていた大貴族一家と、それを手伝い、時には参加していた護衛の兵士と使用者達の抹殺。

大貴族相応の広さの敷地と屋敷、そして数多くの腕利きの護衛と、屋敷のあちこちに散らばる使用者達への対策も考えて、現在実働出来る戦闘員全員を総動員した大掛かりな作戦だ。

だが、腕利きとは言っても所詮は『一般的な兵士』としてであり……その全員が帝具の優れた使い手である彼らナイトレイドの敵では無い。

「う、うおおおおおっ!!」

剣を構えた護衛が雄叫びを上げながら剣を振り上げる。

「——葬る」

それが振り下ろされるよりも遥かに早く、黒髪の少女が手にした長刀を一閃させ、彼の喉笛を深々と切り裂いた。

吹き上がる血潮——同時にその傷口から禍々しい紋様の黒い文字のようなものが這い出したかと思うと、あつという間に全身へと広がり、悲鳴すら上げる事無く護衛の男は絶命した。

——これが、どれほどの小さな傷口からでも、強力な呪毒を流し込む事で問答無用で対象を死に至らしめる凶悪な能力を持つ刀の帝具、『一斬必殺』村雨の力。

しかもそれを振るうのは、達人という言葉が生温く聞こえるような技量を持つ剣士、アカメ——再び一切の隙も容赦も無い構えを取った彼女を前に、生き残った護衛達は踏み込む事すら出来ずに後ずさる事しか出来ない。

そして、逡巡する暇すらも与えられない事はない。

「ぬうんっ!!」

次に踏み込んだのは、全身を銀色に輝く鎧に身を包んだ、2 m近い長身と隆々たる肉体を持つ巨漢——巨大な刃を持つ槍が凄まじい気迫と共に薙ぎ払われ、一気に2人の護衛が鎧ごと上半身と下半身を泣き別れにしながら倒れ付した。

噴水のように吹き上がる血飛沫が鎧の男の全身を濡らすが、脈動するかのような銀の光沢は、全く色褪せる事無く輝き続け、龍のような金色の双眸は尚も次なる標的を向いている。

「ハ、ハのおっ!!」

恐怖を塗り潰すかのように、小銃を手にした護衛が銃弾の雨を撒き散らすが、鎧の男はその全てを銀の装甲で受け止め……一步、また一步と距離を詰める。

そしてとうとう目の前まで近づくと、凄まじい力で小銃の銃身を握りつぶした。

「——効きやしねえよ……テメエらの腐りきった心が放つ一撃なんざなあっ!!」

怒りの咆哮と共に振るわれた鉄拳は、その首を360度捻転させながら護衛を屋敷の壁へとめり込ませる。

——銃弾の雨を正面から受けても傷一つつかない強固な装甲と、荒れ狂う龍の力を持つ鎧の帝具、『悪鬼纏身』インクルシオ。

それを纏うのは、かつて帝国に所属し、義憤の心に駆られて革命軍へと身を投じた熱き魂を持つ漢——『百人斬り』のブラート。

その強さは、帝国の兵士ならば誰もが知っている——それに立ち向かう事の無謀さ

も。

「ひっ……ひいいいいいっ!」

聞きしに勝るブラートの圧力と、肩を並べていた同僚たちの壮絶な死に様に、完全に戦意を喪失した者達が一齐に身を翻して逃走を図る。

——その行動を実行に移そうとする前に、轟音が響き渡り、彼らは脳天から脳漿をぶち撒けながら崩れ落ちた。

「だから、逃がさないって言ってるでしょ?」

呆れたように呟きながら、ピンクブロンドの長髪を両サイドで纏めた少女が、中庭の上に張られた足場代わりの糸の上から彼らを睥睨する。

彼らを葬り去ったのは、それぞれ一発ずつの銃弾——それを放ったのは、少女が手にした長大な砲身を持つ巨大な銃の帝具『浪漫砲台』パンプキン。

所持者の精神力を銃弾として放ち、背水が迫れば迫るほどその威力を増すと言われている、帝国における銃の原点にして完成形とされる帝具である。

その帝具の性能以上に凄まじいのは、少女の技量。

彼女は月明かりのみが照らすこの闇夜の中で、複数対象へのワンショット・ワンキルを事も無げに成し遂げてみせたのだ。

しかも、ともすれば幼いとも言える容姿を見れば分かるように、その実力は未だ発展途上。

それこそが、この少女——マインの恐ろしさとも言えた。

「これで、この片付けは完了ね——そっちはどう、ラバ？」

マインが仕留めた者を最後に動く者のいなくなった中庭を確認してから、マインは傍らに跪くゴーグルを掛けた緑髪の青年——ラバックに呼びかける。

「——ああ、裏口に向かつて……3人。身のこなしからして、全員使用人だな」

その言葉にマインが目を向けると、そこには確かに必死の形相で駆ける屋敷の使用人の姿が朧気に見えた。

そう告げる青年の瞳は閉じている——にも関わらず、人数どころかその内容まで知り得たのは何故か？

その正体は糸——青年の腕に取り付けた箆手から、屋敷中に張り巡らされた目に見えないほどに細くしなやかで、それでいて鋼以上に強靱なソレから伝わる振動によって、

青年は彼らの存在を感じ取ったのだ。

「オツケー、任せ「ちよーつと待った」

そう言いながらパンプキンを構えるマインの腕を、ラバックがそつと抑えつける。

「少しは俺にやらせてくれよ。このままじゃ、俺だけ楽してるみたいだし——さっ!!」

そう言うや否や、彼は指を僅かに、素早くこねくり回すかのように動かした。

すると、そこから伸びた糸の一本が、キリキリという音を立てながら翻り、使用人たちの首へと巻き付くと同時に、締め上げながら宙空へと吊りあげる。

彼らは自分の首に巻きついた糸を振りほどこうと藻掻くが、肉に食い込む糸はびくともしない。

程無くして使用人たちは、一分もしない内に全身の穴という穴から液体を垂れ流しながら息絶えた。

「……相変わらずえげつない上に見事な手並みね」

「褒め言葉どーも」

マインの称赞とも皮肉とも取れる言葉におどけて答えながら、ラバックは人知れず先の凶行を成し遂げた糸の帝具——『千変万化』クロスステールをピン、と弾く。

糸という形状を活かし、その二つ名の通り無限とも言える応用力を持った強力な帝具である。

「——これで粗方片付いたか」

「ああ、後は……メインターゲットの当主とその娘と、それについてた護衛……後は、屋敷に隠れてる使用人4、5人つて所だな」

本邸にいる当主の元には既にレオーネが向かっており、使用人達が隠れているエリアにも残る仲間の1人が行動中——任務遂行は時間の問題だ。

「——娘の位置は？」

「離れの倉庫に向かつてるな……護衛1人と一緒だぜ？」

「了解。私が行く」

ラバツクの言葉にアカメが村雨の血を払って納刀しながら名乗りを上げる。

「例の生贄君もそっちに向かつてるみたいだけど……大丈夫か？」

「問題無い。ターゲット以外を葬るつもりは無いし……いざとなっても、確実に勝てる」
「りよーかい、なるべく穏便に頼むぜアカメちゃん」

そう言う彼女の顔には、気負いも油断も一切存在せず、それが厳然たる事実である事を教えてくれる。

ラバツクは苦笑しながらアカメへと笑いかけ——新たに感じた糸の手応えに顔色を変えた。

「……………っ!? 待てっ!! 裏口から侵入者……………1人、2人……………計9……………いや、一人増えて10人!!」

全員訓練された動き……………恐らく帝国兵!!」

『……………!!』

その言葉に、全員の顔に緊張が走る——騒ぎを聞きつけて衛兵たちが横槍を入れてくるのは予想していたが、想定以上に早すぎる。

「2人の予想が当たったって訳ね……………どうするの?」

アカメとレオーネから、屋敷の監視中に感じた違和感については全員が聞かされている。

その場にいる全員を代表して、マインが皆に問いかける。

——暗殺というその任務上、彼らナイトレイドは想定外の戦闘に入る事も少なくはない。

このように途中で官憲等の第三者の介入があつた場合、ターゲット抹殺を担当する仲間の元に応援に向かいつつ、残る人員で障害を可能な限り排除し、離脱するのが常だ。

今この場における指揮官はラバック——戦闘力や場数はアカメやブラートに劣るも

の、使用する帝具の特性上、最も状況判断に優れているからだ。

いつものように指示を下そうとするが、作戦前に聞かされたアカメとレオーネを監視していた者の存在がその判断を邪魔していた。

——そして、更にラバックを動揺させるような情報が、クローステールから伝わる。

「こつちに向かつて2人……っ!? 速い!? それにこの感覚……まさか空を飛んでるのか!？」

自分たちのいる本邸の方へと近づいて来る存在を糸が感知するが、その感覚は明らかに『軽い』。

糸の境界が張られているのは、この中庭上空を除けば地面に接した場所のみだが、それでも容易には飛び越えたり出来ない程度に徹底的に張り巡らされている。

——しかし、そこからはまるでそよ風のような感触が伝わってくるのみだ。

反応が返ってきた場所は、とても跳躍出来るような高さでも距離でも無い。

そんな所業、ナイトレイドの中で最も身体能力に優れるレオーネでさえも不可能だろう。

速さもまた桁違い——下手をすればアカメに匹敵……いや、ともすれば超えるかもし

れない。

そして、その後に僅かに遅れて向かってくる者は、更にラバックの想像の上を行った。

——前者とは違い、ただ地面を走っているにも関わらず、糸に反応が殆ど無いのだ。

糸の結界は縦横無尽——その密度は目の優れた達人であつても全てを避けて通るのは非常に難しい程だ。

しかし、この2人目はその全てを時には身を翻し、時には跳ね、時には屈んで、糸に触れる事無くひたすら前へと進んでいく。

(……まさか、見えてるつてのか!? このクロスステールの糸、全てが!?)

遥か高く、遠い距離を飛び越え、殆ど視認出来ない程に細い糸をこの闇夜に全て見極めるなど、常識外れも良い所だ。

更に最悪な事に、自分たちはそのような事が出来てしまう存在を既に知っていた。

「まさか……帝具使いが2人だと……!? 冗ッ談じゃねえぞクソツタレ!!」

例えどのような苦境であっても、飄々と受け流してしまうような普段の態度をかなぐり捨てて、ラバックが頭を掻き毟りながら悪態を吐く。

自分を含めたナイトレイドの面々は、皆が皆強力な帝具を持つ手練れではあるが、相手もまた帝具使いならば話は別である。

この人数差ならば恐らくは勝てる。

——しかし、相手がこちらの技量や帝具の性能を上回っていたら？

——仲間に犠牲が出てしまったら？

——犠牲が出なかったとしても、脱出が遅れてしまったら？

敵の情報がクローステールからの振動という限定的で断片的な情報しか無い事も、ラバックの中で『もしも』というネガティブな思考を溢れさせる要因となっていた。

どうする、どうする、どうする——焦る余り、頭が熱くなり、思考が空回りしていく。

「——落ち着け!!」

だが、ぐちやぐちやになりそうな頭の中を打ち消すかのような一喝が、ラバツクの鼓膜を激しく打った。

それはブラートの声——ナイトレイド筆頭とも言える漢の声は、ラバツクを一瞬にして思考の渦から引き上げさせる。

「今のお前は指揮官なんだろ? なら自信を持って。」

部下である俺達はお前に従うし、そこに何かミスがあれば、部下である俺達が補ってやる」

その体格に見合った巖のようにどっしりとした言葉には、ブラートからラバツクへの厚い信頼を感じ取る事が出来た。

それだけで、不思議と頭が冷えていくのを感じる。

「……だな。悪イ、ガラにも無くテンパってたわ」

そう恥ずかしそうに頭を掻き、ラバツクは頬を何度か張る——その顔には、冷静な暗殺者のソレへと戻っていた。

そして冷静になった思考で出した結論と作戦を、仲間達へと伝える。

「帝具使いが二人……予想以上に厄介なヤツらが来たもんね……」

「それで、どうする？ 戦うか？」

「——いや、あくまで任務を遂行しながら、応戦しつつ撤退する。」

アカメちゃんは当初の予定通り離れの倉庫のターゲットへ、ブラートは屋敷内でターゲット殲滅の補助、俺とマインちゃんは最も近いA地点まで後退してから、脱出の支援だ」

帝具使いを相手にするには、あまりにもいつも通り過ぎるその指示に、マインが抗議の声を上げる。

「——それだけ？ 帝具使い二人相手に、ちよつと無用心過ぎるんじゃないの？」

「ああ……けど、あいつら、俺らの所じやなくて、屋敷中に散らばってる——多分だけど、あいつ等のメインの狙いは俺達じやない」

糸からの反応が帰ってきたのは、自分たちがある程度戦闘を行った後だ——戦闘音や銃声などもかなり響いた後だというのに、奴等はその発生源であるこの中庭に一人として向かって来ていない。

その動きも一人一人バラバラで、退路を塞いだりする様子も無い……これはつまり、彼らは元々違う目的で動いていた可能性がある。

そして、この人々が寝静まった夜中に、大貴族の屋敷の表からでは無く裏口から入つて来たという事は、彼らは表からは入れない理由があつたと考えるのが自然だ。

最悪、彼らを放置したとしても、任務に大幅な支障を来す可能性は低い。

正直危険な、賭けとも言つて良い予想ではある——しかし、ラバックはそう結論付けた。

勿論、奴等の目的が何なのか分からない以上、長居は無用——だからこそ、この場では最も素早く動けるアカメを屋外へ、そしていざとなれば壁や天井、床といった障害物すらも打ち碎けるパワーを持つブラートを屋内へと向かわせ、一刻も早い任務の達成を目指す。

そして仮に帝具使いと遭遇したとしても、最後までこの屋敷内に残る四人ならば、各個撃破さえされなければ応戦しつつ脱出する事も可能だろう。

「でも——」

そう説明を受けてもまだ納得は行っていないのか、マインが更に反論をしようとするが、その肩を再び糸の上に舞い戻ったブラートが抑える。

「——そこまでにしろマイン。今この場でボスから全権を任されてるのはラバだ」

「む……」

そう言われてしまつては、マインもそれ以上何も言う事が出来ず、少し頬を膨らませながら黙る事しか出来なかつた。

そんな彼女の頭を、ブラートはくしやり、と撫でる。

「心配するな——俺達なら大丈夫さ」

「べ、別に心配なんて……っつーか子供扱いすんな!!」

顔を赤らめながらがっつ!! と吼えるマイン——ラバツクはそれを和やかそうな顔で一瞬見つめると、再び糸から察知した気配に表情を引き締める——帝具使いと思しき二人が、ほぼ同時に本邸へと侵入したのだ。

「さて、お喋りはここまでだ……皆、頼むぜ!!」

マインと共に後退すべく糸を複雑に操作しながら、ラバツクは仲間達へと指示を下した。

かくして、再び物語は動き出す。

「——こうなったらやるしかねえ!!」

「……標的ではない」

離れの倉庫では、少年タツミと少女アカメが運命の出会いを果たし、

——そして屋敷では、本来語られる事は無かった筈の遭遇が起こっていた。

「ぐ……う……た、助けて……む、娘が……娘がいるんだ……」

この屋敷の主である恰幅の良い壮年の男が、レオーネに首を掴まれながらも必死に命乞いをしていた。

しかしそんな言葉など歯牙にもかけず、彼女は首に込める力を更に増す。

「安心しろ、すぐ地獄むじこうで会える」

「む、娘まで……な、情けは無いのか!？」

無辜の人々を散々責め殺した外道でも、自分の娘ならば可愛いか——内心嘲笑しながら

ら、止めの如く言い放つ。

「情け……? 意味不明だな」

そして、身の毛もよだつような鈍い音が響き渡り、男の全身から力が抜ける。

——その瞬間、レオーネは手を離しながら素早く身を屈める。

それとほぼ同時に、月夜に照らされながら銀光が奔り、レオーネの髪を一房巻き込みながら、男の首を真つ二つに切り飛ばした。

「……っ!?!」

それを横目で確認しながら、四肢の全てを使って全力でその場から飛び退く。

「おやあ……? 本当なら、油断してるアンタの首を切り飛ばそうと思ってたんだが……失敗失敗」

「バーカ、獲物を仕留めた後も油断する獣が何処にいるんだよ?」

そこにいたのは、額につけられた瞳のような宝玉をギョロギョロと動かしながら、袖口から飛び出した刃の血を舐めて不気味に笑う長身の男——ザンクの姿があった。

「——その帝具……スペクテッドか。つつー事は、お前さんが首切りザンクか? 処刑されたと見せかけて、帝国の狗になってるって噂は本当だったみたいだな」

「そういうアンタの付けてるソレは……噂に名高いライオネルかい？」

顔も見かけた事がないと見ると……これはいきなりアタリを引いたようだ……愉快愉快」

その言葉に、レオーネは鼻で笑う。

「ハッ、私が当たり……違うね、ハズレもハズレ、大ハズレだよ……お前にとつちやね」

「ほほう……なら——」

『——試してやろうか』

首切りの狂人の刃と、獣の拳が激しく交錯した。

そして、もう一方でも二人の少女が遭遇を果たしていた。

「——見かけない顔ですが……どなたですか？」

「は、はははは……そっちは見かけた事無くても、こっちは大いにあるんすけどね——」

……」

巨大な鋏の如き刃を持つ眼鏡を掛けた破綻者が首を傾げ、小さな兎が全身をダラダラと冷や汗を流す。

——前の二人と比べれば遥かに締まらないが、それは確かに帝国と革命軍にとっての転換点の瞬間であった。